

---

# 辺境護民官ハル・アキルシウス

あかつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

辺境護民官ハル・アキルシウス

### 【Nコード】

N1855Z

### 【作者名】

あかつき

### 【あらすじ】

帝都で下級官吏として勤めていたハル・アキルシウスは、とある出来事で蛮族が跳梁する北方辺境へ護民官とされ左遷されてしまう。

文化、習俗、人種の著しく異なる辺境の地で、何の支援も与えられず廃棄都市を拠点として業務に当たる事になったハル・アキルシウス。

蛮族の神官（美女）過去の英雄（死霊）の協力をなりゆきで得たハルの辺境経営がはじまった。

## 序章 その1（前書き）

色々と試していこうと思い、この作品を作り始めました。  
お楽しみいただければ幸いです！

## 序章 その1

丁度峠も登りから下りに差し掛かる、少し開けた場所で、旅装に身を包んだ青年は額の汗を拭い、見渡す限りの緑の大海原に、思わず歩みを止めて見とれた。

所々に森が切り開かれ、畑や牧草地が形成されており、その近くには村落と思しき粗末な屋根の建物が立ち並んでいる。

しかし炊煙と思しき煙が薄く立ち上るそれ以外の場所は、うつそうとした森が未だ手付かずの風情で広がっており、天気の良い今日はその先の遙か彼方にある大東山脈までもがうつすらと目にするこ  
とが出来た。

「これは凄い・・・こんな景色は始めて見た。」

誰に言うとも無く、ぽつりとつぶやく青年の背中には、はちきれんばかりに何かが詰込まれた背負い袋。

暑い最中にもかかわらず、厚手の衣服にがつちりと革のブーツで整えられた足元、左手に引く手綱の先には馬が一頭ついて来ている。

青年に続いて素直に歩みを止めた馬の背にも、見ればかなりの荷物  
物が左右に振り分けて結わえ付られている。

「さあて、もう一息だ。」

そついいながら、馬を優しく促し歩き出す青年。

背丈はそれほどでもないが、がつちりした体格、短く刈りそろえられた髪はつややかな黒色で、目は涼やかな一重目蓋。

服装も帝国風に縫製されてはいるものの、布地の色彩や材質は帝国南方の群島嶼地方のものであり、その特徴的な風貌と相まって、青年の出身は帝国に住まうものであれば一目見ただけで南方のヤマ  
トの民と分かる。

しかし、旅の商人にしては、青年の雰囲気は固く、客商売が向くような感じではない。

また、荷物もこのような辺境で珍重される宝飾や酒、穀物といっ

た商品ではなく、どちらかと言うと生活用品が多く見て取れる。

「もう少しでアルマール族長の集落に着きますよ。」

その後ろからたおやかな女性の声が青年の背に向かって発せられた。

「・・・何時までついて来る気ですか神官殿？・・・いい加減に戻られたらどうですか。」

「太陽神様の御導きを無碍にする事は出来ません。」

うんざりしたように後ろを振り向いた青年の目に、特徴的で鮮やかな色彩の貫頭衣を身に纏った20代前半の女性が映る。

青年と同じくらいの背丈があり、細身でその長い髪は金色、目は緑色。

典型的な北方の民クリフォナム人の特徴を備えたその女性は涼やかな笑みを浮かべながらも、青年の言葉をやんわりと否定する。

「いや、それは違う、私はただ職務として山賊を追っただけ、そこにあなたがたまたま縛られて転がされていただけの事。」

「いいえ違います、太陽神様があなたをあの場合に御導き下さらなければ、私は人の姿をしたケダモノにもいいようにされてしまっていたでしょう。」

胸の前で手を組み合わせ、そのときの恐怖と安堵を思い出しているのか、目をつぶってその女性神官は言う。

「・・・その件はもう忘れていただいて結構だと、さっきから言っているでは無いですか！そもそもあなたは大地の巡検とか言う、修行の旅の途中では！？」

「恩を受けた相手にその恩を返すのもまた修行です、そもそも、あなたは地理不案内で困っていたのではないのですか？」

青年の言葉をさらりと受け流し、女性神官が切り返すと、青年が困惑の表情となる。

「・・・それは・・・」

「ですから、私が道案内をして差し上げましょうと・・・」

「要らない道の案内までしようとするからでしょう！」

一旦困惑の表情になった青年だったが、再び額に青筋を浮べて怒鳴る。

「太陽神に仕える神官は婚姻を否定されておりません、私は何時でもオツケーですよ？」

「・・・自分はおっけーじゃ無いのです。」

涼しい顔をして言葉を返す女性神官にいささか疲れた様子で返事をする青年に、女性神官はくりつと首を傾げてぼそりとつぶやくように言った。

「・・・照れなくとも良いではありませんか？」

「ちがうわっ！」

「そうむくれないで下さい、せつかくの旅の道連れ、楽しくおしゃべりでもしながらの方が楽しいですから。」

「・・・。」

「私はこう見えてもこのあたりを旅し始めて10年近く経ちます、この北方辺境の村々には知り合いも多く居ますし、道案内も出来ます、あなたの御役目にもきつと役に立ちますよ？」

「・・・。」

「夜の御役目にも、ネ。」

「・・・。。。」

「・・・そんな目で見ないで下さい、ちょっと変な気分になってしまいます。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・分かった、夜は置いて、宜しく願います・・・」

「・・・そんな、一番大切なところなのに。」

「置・い・て・くれ。」

「・・・分かりました、でも、いつでもいいですからね？」

「・・・はあ・・・」

結局日中に目的地であったアルマール族の村落へたどり着けず、野営をする羽目になった青年と女性神官は、ぱちぱちとはぜる火を囲んでとりとめのない会話を交わしていた。

青年が持っていた鍋には小川で汲まれた水が焚き火にかけられ、ぐらぐら音を立てている。

青年は道々で摘んだ野草、それから持っていた穀物のかたまりと干した猪肉を用意する。

「・・・そろそろ御名前を聞かせていただけませんか？」

「ああ、自分はハル・アキルシウスと言う、帝国辺境領担当の護民官だ。」

女性神官の問いかけに、青年、ハルは食材の準備をしながら素性を含めてあっさりと答える。

素直に答えをくれるとは思っていなかったのだろう、女性神官は少し虚を突かれたのか、一瞬戸惑いの色を見せたが、すぐに気を取り直し、自己紹介をする。

「・・・そうですか、私はクリフォナムの太陽神に仕える神官、エルレイシアと申します、宜しくハル、そして助けてくれて有難うございました。」

「いえ、職務ですから・・・それから、アキルシウスと呼んで下さい。」

少し口を濁らしたハルに、エルレイシアは諭すような口調で言葉を返した。

「ハル、ここは帝国の州内ではありません、帝国領域という境界の曖昧な辺境の地、そのあなたが仰る職務というものがどれほどの力を帝国で持っているのか私には分かりませんが、為した事は全てあなたが成した事、為す事、それは覚えていた方が良いでしょう。」

「・・・分かりました、ご忠告に従いましょう、が、アキルシウスとお呼び下さい。」

しつこく呼び方を訂正しようとするハルであったが、エルレイシ

アは意に介さない。

「ハルは案外素直なのですね、帝国の護民官といえば、辺境を帝国の版図に組み込むべく働く尖兵のようなものと聞いていましたが・・」

エルレイシアが違和感を感じたのか、思わずそう口にする、ハルは根負けしたのと、エルレイシアの言葉の内容両方の理由から苦笑いを浮かべ、煮立った鍋の中に野草と干し肉を入れ始めた。

ぐつぐつと順調に煮え始めた鍋を見届け、ハルはエルレイシアに向き直る。

「そういつ、役目も負わされている事は否定しないが、ただ、自分を見ての通り、生粋の帝国人という訳ではないので、そこまでその類の仕事に熱心なわけではない、自分は命令された表向きの役目を果たすだけだ。」

「・・・そうですか・・・帝国人がみなあなたと同じ考えなら、クリフォナムの民とも上手くやっていけるのでしょうか・・・。」

エルレイシアがそう言いながらため息を付くと、ハルは厳しい顔になり頷いた。

その理由はハル自身が一番よく分かっている。

「先程の山賊も、帝国人だったからな。」

帝国は、ここ100年で最も大陸で栄え、そして強大化した国家である。

大陸中央部に端を発した帝国は、王政、共和制を経て頂点に皇帝を戴く現在の政体になった。

東は東照帝国とその南に存在するシルーハ王国という大国と接し、西は大洋を挟んで西方国家群と接する。

南は群島嶼地域と呼ばれる半内海で、更に海を経たその先には南方大陸の部族国家が存在し、船舶による交易や通行が盛んに行われ



ている一方、北方は北方大平原と呼ばれる森と草原が広がる未開の地域である。

大陸にはかつて様々な国家や都市が存在したが、帝国の膨張と共にそれら近隣の小国家や、かつての覇権国家は戦争や政争、果ては経済戦争に敗れた末に吸収されてその一部となった。

しかし、大陸には未だ帝国の力が完全に及ばない地域も存在する。元々文化的には南方の系譜を引く帝国は、寒さに弱く、また距離的な理由もあって北方辺境の支配はそれほど進んでいない。

南方の群島嶼地域と併せ、北方は帝国の2大辺境であったが、つい5年ほど前に群島嶼諸国連合は帝国との激しい戦争の末に敗れて完全に併呑されたため、今や北方は帝国唯一の辺境となった。

帝国は支配した地域に州を設置し、総督を帝国から派遣して支配に当たらせる。

しかし、北方辺境の地は未だ部族社会が主体の帝国人が蛮族と呼ぶ人々が住み暮らす地域で、帝国の領土宣言があるとはいえ、あくまで対外的なものであり、実際は支配が行き届いているとはいえない。たい地域であるため、州を設置していない。

そのため、辺境護民官という官吏を派遣し、その地域の部族民の宣撫工作や懐柔、そして討伐に当たらせる制度が出来た。

名目上は帝国の領土であることから、護民官の身分は内務官吏に準じ、権限は徴税や民政に留まらず、警察権や裁判権、そして有事の際の帝国軍の派遣要請権やその一時的な指揮権、そして暫定的な兵員招集権までを有する、非常に強大な権力を持った官吏である。

派遣された地の民度が上がり、帝国に編入可能なだけの税収や財政上の基盤が出来上がり、皇帝の命令により州が設置された段階で権限は自然消滅する。

後は本人が望めば新しく設置された州の官吏、多くは州総督として採用されることが慣例であったが、かつては高級職を目指す優秀な官吏の登竜門であったため、新設の州総督で終わる者はほとんど居らず、大抵が中央に栄転していった。

しかしそれも今や昔の話。

与えられた権限は辺境地域だけのものに限られるとは言え、権限の大きさ相応の位階が付与されているとはいえ、現在では決して栄達や名誉のある官職とは言えなくなってしまうていた。

その理由は明白で、近年目ばしい地域にほとんど州が設置されてしまったことから、辺境護民官はいわば実体の無い名誉職となり、老齢で退役間際の官吏や、何か問題を起こして元の職場に置く事が適当でない官吏を左遷する為の官職となってしまうている。

当然、現地へ赴く者など全く居らず、一応設定されている3年間の任期が切れた段階で退職するか復職する為、その任期は自宅で引退前の有給休暇として家族と過ごすか、半ば謹慎扱いでいる者がほとんどであった。

そんな閑職と成り下がった辺境護民官であるが、本来帝国の内務官吏に帯剣は許されていないところ、辺境護民官だけはその任地や職務の特殊性から帯剣と武装が許されており、実際、ハルも着込んでいるのは厚手の帷子、武器は刀、小刀、弓矢を持っており、荷物の中には先祖伝来の鎧兜も入っている。

ただ、帯剣許可も今や現地に赴くものが存在しない事から形骸化している。

「それで、ハルの任務と割り当て地域はどこなのですか？」

「・・・クリフォナムの民が住まう地域だ・・・」

「・・・えっ！？正気ですか？」

ハルの言葉に驚きを露わにするエルレイシア。

それも当然、クリフォナムの民とは北方辺境は愚か、はるか極北地域にまで居住地を持つ北の民である。

民の中でも更に数十の部族が存在しており、更にその部族の中でも住み暮す地域ごとにそれぞれの首長が居る。

人口にすれば帝国と同じくらいの規模であり、居住地域は北方領域だけで見ても帝国のほぼ半分の広さがある上、極北地域まで入れ

れば、帝国の優に4倍から5倍の領域になる。

しかも、その地域は帝国のように道路や港湾が整備されてはおらず、部族の者が付けた道があるといっても、無いよりはましといった風情のもので、その他は丸っきりの未開の地域であった。

帝国がただ単に東方の諸国への軍事的な牽制の意味合いから、領有宣言をしただけの地域で、名目上はともかく、一度も帝国が実質的に押さえたことのない地域であり、帝国に反抗してはいないものの、支配を受け入れているわけでもない。

むしろ帝国の領域である事を知っている者は部族長や首長くらいの主だった者だけで、そのほかの民は全く名目上とはいえ帝国の支配下にあることすら知らず、政治的なこととは関係なく日々生活している。

そのような人々を帝国に恭順させようとしてもできるわけがない。

ましてや官吏風を吹かせて統治など出来るはずも無い。

笑われて終わりか、機嫌を損ねれば殺されてしまう。

また、クリフォナム人は、蛮族と呼ばれてはいるが、誇り高く、武を重んじるという蛮族特有の性質を有してはいるが、文字を知り、農業を知る民であり、無用な争いや混乱を望まない民でもあり、真性の蛮族というわけではない。

身体的には特徴があり、他の帝国領域に暮らす者達とは著しく異なる為、差別的な扱いを受けることが多いが、文化水準はそれなりに高い。

帝国内の人民の多くが黒か茶色の髪の色を持ち、瞳の色も黒か茶色であるが、クリフォナムの民は、長身、白皙、金色や銀色の髪を持つものが多く、また瞳の色も青や灰色、緑色の者が多くいる。

同じような人種として、北方領域の南部及び西部に住むオラン人があるが、文化的にはかなりの差異があり、おまけに両方とも長年の領域争いがあつて、互いを嫌っており、争いが絶えない。

ただ、言葉にそれ程違いがなく、帝国公用語であればクリフォナム人やオラン人も理解する事が出来る為、大陸では帝国公用語が共通

語として使われており、救いと言え言葉に不自由はしないと言う事ぐらい。

そのような辺境の真っ只中にたった一人で派遣された、ハル・アキルシウスであった。

## 序章 その2

「うん、どれだけか広いか分からないが、全部だ、全部といわれた、任命書も有る、任期は一応5期15年、クリフォナムの民を恭順させられなければもう15年、恭順させるまでは戻らなくとも良いそうだ・・・」

努めて明るく言うハルに、エルレイシアが少し言いにくそうにしながらもずばりと聞く。

「・・・それって、左遷ではありませんか？」

「・・・そうとも言っな。」

一瞬、詰まったが、ハルは任命書をエルレイシアに示しつつ答える事が出来た。

「・・・何をしたのです？」

「・・・内緒だ。」

「教えてくれないと、夜中に襲っちゃいますよ？」

「・・・」

怯えを含んだ目でエルレイシアを見るハル。

「そんな顔をされると、ちよっぴり傷つきます。」

顎の下に人差し指を付け、あざとい表情でハルを見つめるエルレイシア。

ハルはがつくりと疲れたように顔を落としてつぶやいた。

「何でこんなの拾ってしまったのか・・・」

丁度いい具合に沸騰し始めた鍋を見ながら、ハルは反論を諦めて任命書をしまうと、鍋に用意していた食材を投入し始めた。

「あ、これは米ですね、初めて見ました、干して固めてあるのですか？」

「ああ、そうだ、煮てやれば元に戻る、しかし、米を知っているのか、物知りだな。」

エルレイシアが食材に興味を示し、話題が変わった事にほっとし

ながら、ハルは質問に答えた。

「はい、帝国製の博物学の書籍を見たことがありますて、温暖で湿潤な気候でないと育たないとか・・・残念ながらこの辺りでは育ちませんね。」

「ああ、無理だな。」

北方辺境とは言っても、あくまで帝国から見れば北方なのであり、気候はそれほど厳しくはないが、それでも米の生育には条件が悪い。帝国、そして北方の民のクリフォナム人も基本的には麦を育てている。

米を主として生産しているのは帝国では群島嶼部のみで、他には東照帝国が主要な穀物としている。

しかし、米は麦に比べて単位面積当たりの収穫が多くはあるものの、豊作と凶作の格差が酷く、東照帝国では凶作のたびに政情不安が起きている。

ハルは木製のおたまを取り出し、ゆつくりとかき混ぜながら鍋が煮えるのを待つ。

しばらく、無言の時が過ぎた。

ハルは、ゆつくり、そして静かに手を動かし、エルレイシアは今までのおしゃべりが嘘のように、落ち着いた表情でその様子を黙って眺めている。

そして、出来上がりが近付くと塩と香草を刻んで乾燥させたものを投入し味を調える。

「ハルは準備万端ですね？白塩や香草を用意しているなんて・・・」

「色々言いたい事はあるが、とにかくあんたは・・・そうか、賊に捕まってたんだっけな・・・」

「はい、荷物は全て失ってしまいました、食糧や衣類はともかく・・・経典や神話辞典を失くしてしまったのが心苦しいですね・・・私の師から賜ったもので・・・」

エルレイシアは少し寂しそうに言った。

「・・・すまん。」

「いえ、良いんですよ、ハルが悪いわけではありませんから。」

「あーいや、その、実は・・・荷物は・・・」

「？」

言葉を濁すハルに、エルレイシアは訝しげな表情で小首をかしげる。

その様子に心苦しさを感じたのか、ハルはエルレイシアから視線を外して口を開いた。

「あるんだ、実は、奴らが追ってこれないように、食糧や水が入ってた背囊を持ってきたんだが、それと一緒にくたになってて分からないくてな、色々本やら女物の服やらが入ってた、多分あんだのだろう。」

「

「!!!？」

「つい、言いそびれてしまつて・・・」

そう言いつつ、ハルはバツの悪そうな顔のまま、一段落付いた調理の手を止めて徐に立ち上がると、自分の荷物の中から綺麗な刺繍が施された鞆を取り出した。

「これだろう？早めに言わなくて悪かった。」

ハルは鍋の側に帰りながらバツの悪さを取り繕うように、ぽんぽんと軽く表面についたほこりを手で払ってから、エルレイシアに鞆を手渡す。

「・・・・・・」

「・・・・」

無言でハルを凝視したまま、エルレイシアは鞆を両手で押し頂くように受け取る。

「・・・・」

「・・・・だから、悪かつたって言ってるだろう・・・」

その無言と視線を抗議のものとして解釈したハルが我慢しきれずにそう言つと、エルレイシアは受け取ったかばんの中から一筋の細い黄色の布を取り出して、ハルに近付く。

「な、なんだ・・・」

座ったまま身じろぎするハルに構わず、エルレイシアはその布をハルの帯の左脇部分に結びつけた。

「これは太陽神のお守りです、これを収めてください。」

「・・・ああ、ありがとう。」

ようやく口を開いたエルレイシアに、安堵したハルは素直にそう言ってお守りを見る。

「綺麗な色だな。」

何で染められたものだろうか、鮮やかな黄色が紺色の帯に映える。

「良く似合っていますよ。」

笑顔で言うエルレイシアに、少し照れ臭そうな顔をしたハルは、木の椀を2つ荷物から取りだし、良く煮立てた粥をよそって木の匙と一緒にエルレイシアに手渡した。

エルレイシアが椀を覗くと、ほんのりと香草の香りが湯気と共に漂う。

早くも粥を食べ始めるハル。

エルレイシアは椀と匙を奉げ持ち、しばらく瞑目して休んでいる太陽神への感謝の祈りを口ずさんでから、徐に匙で粥をすくい、口へと運んだ。

「・・・おいしい」

「だろう？残り少ない米と香草だが、今日は特別だ、捕らわれの身で体が弱っているだろうからな。」

おいしそうに粥を口にするエルレイシアに、ハルはそう言いながら素直に嬉しそうな笑顔を浮べる。

粥を口にしながらも、木椀ごしにハルのその笑顔を上目遣いで盗み見ていたエルレイシアはポツリとつぶやく。

「・・・そういう、さりげない優しさは、ずるいですね。」

声は小さく、相手には届かない。

「何だ、お代わりか？」

もりもりと粥を平らげていたハルは、手が止まったエルレイシアを認め、自分の木椀を傍らに置くと、うん、と頷きながらしゃもじ



を持ち、空いた手をエルレイシアに差し出す。

「遠慮しなくて良い、少し多めに作って置いたからな。」

「・・・いえ。」

盗み見ていた事に気付かれ、顔を赤らめたエルレイシアは、慌てて視線を逸らしまだ碗に残る粥を匙で口に運ぶ。

その様子を見たハルは、しばらくしてエルレイシアが碗を空にするのを待つてから、その碗を取り、粥を満たしてから返した。

そうして食事が終わると、ハルは手早く食器を汲み置いていた手桶の水で濯ぎ、空拭きした後に立ち上がると、馬から下ろした荷物の場所へと歩いて行く。

そして食器を片付けると共に中に入っていた毛布を取り出し、火の近くに帰るとエルレイシアへ手渡した。

「・・・何時から捕まっていたのかは知らないが、疲れているだろう？俺は大丈夫だから休んでおいてくれ。」

「はい、それでは・・・」

確かに道中で山賊に襲われてから縄で縛られ、まるで荷物のように運ばれるだけであったとは言え食料や水はほとんど与えられなかったために、体力は消耗している。

エルレイシアは素直に毛布をハルから受け取ると、火のそばに座ったハルの横へいそいそと寄り添い、こてんと横になった。

頭はもちろんハルの膝の上。

「・・・何をしている・・・」

ぴしつと青筋を再び浮き出させるハル。

「えっ？」

何を質問されているか分からないといった様子でハルを見上げるエルレイシア。

そして毛布から両手をちょこりと出し、ぽすつと打ち鳴らした。

「そうでした、忘れていました。」

「神職の身で慎みや遠慮を忘れていたとは不幸だな、まあ思い出したのなら良いから、どけてくれ。」

ハルが身じろぎすると、エルレイシアはがしつとその膝頭を意外と強い力で掴んで固定すると口を開く。

「ハルが襲っても良いんですよ？」

「寝ろっ！！」

## 序章 その3

翌朝、森の木々を通して差す朝日と、小鳥の鳴き声で目を覚ましたエルレイシアは、ハルの膝を枕にしたまま眠っていた事に気がついた。

ハルはうつらうつらと胡座のまま船を漕いでいる。

ハルは組み立てられた長弓を脇に挟み込むようにして自分の身体へ立て掛け、そしてその近くに5本程の矢が地に突き立てられていた。

獣や夜盗の襲撃に備えたのだろうが、エルレイシアは何時ハルが弓矢を出したのか記憶に無い。

ぼんやりと寝起きの頭でそんな事を考えながら、エルレイシアはハルの膝に頭を載せたまま、じーっとその居眠る顔を見上げる。

しばらくそうしてから、少しあきたように、そして愚痴るように言葉を小さく紡ぐ。「・・・なかなかの男前ですね・・・」

彫りが深く、顔の凹凸がはつきりしている大陸に住まう諸族よりも顔立ちは全体的に彫りが浅く、穏やかな印象を与えるが、筋の通った鼻梁に形の良い眉、引き結ばれた唇は凛々しさを感ぜさせる。

その性格と力を表すような少年の純粹さと男の精悍さを併せ持ったハルの顔付きに見とれるエルレイシアは、昨日の盗賊とハルの一戦を思い出す。

木陰から飛来した5条の矢に足を貫かれてひっくり返る仲間に激しく動揺した盗賊達の真ん中に飛び込んだハルは、流れるような体捌きで剣を振り残る5名の盗賊を切り伏せた。

武器を一度たりとも振わせる事なく、数回の刃鳴りが聞こえた後、立っているのは剣を静かに鞘へと収めるハルのみ。

盗賊達は息こそあるものの、抵抗を一切封じられ地に伏した。

猿ぐつわをかまされ、たき火の側に転がされていたエルレイシアは、別の盗賊が自分という獲物を横取りに来たのだと観念したが、

ハルの出した第一声に安堵のため息を吐く。

「・・・うわっ！？何だこの美人は！！？」

縄を解かれて解放されたエルレイシアは、帝国の辺境護民官を名乗るハルに保護を求め、折から道案内を探していたハルがこれを受け入れたので、同行することにしたのである。

もう少しハルの顔を正面から見てやろうと身じろぎしたエルレイシアに、ハルが気付いて目を覚ます。

「ああ、起きたのか。」

「はい・・・あん、そんな・・・」

「・・・妙な声を出さないでくれ。」

ハルはエルレイシアの肩を優しくも強引に押して起き上がらせると、すばつと毛布をはぎ取って自分も立ち上がる。

無理矢理起こされ、毛布を取り上げられたエルレイシアが抗議の声を上げるが、ハルは意に介さず、突き立ててあった矢を矢筒に戻し、弓の弦を外す。

「今日の昼までには村に着きたい、馬に乗って良いから急ごう。」

「同行しても良いのですね？」

「・・・不本意だが仕方ない、兎に角、まずは拠点を確保しなければいけないからな。」

エルレイシアの言葉に渋々頷き、ハルは荷物を手早くまとめ、それを自分で背負い、てエルレイシアをひょいと軽く抱き上げる。

「ではお勤めをお願いしようか。」

「えっ？」

思いがけなく抱き上げられ、あまつさえ昨夜あれほど拒んでいたとは思えない言葉に、期待感と動揺でハルを見つめるエルレイシア。しかし、熱っぽく見つめるエルレイシアの視線をいぶかしげに流すと、ハルは若干空いた馬の背にエルレイシアを乗せた。

「・・・何ですか！」

「・・・何だ？」

「酷いです、期待させておいて・・・」

「・・・道案内で何を期待するって言うんだ？」

微妙に噛み合わない会話。

ハルはエルレイシアの抗議に疲れた声で答え、馬の口取りをするべく綱を手にし、森の小径を進み始めた。

アルマール族の族長である、アルキアンドは帝国から発出された1枚の文書を前に思案する。

ここは村の中心に所在するアルマール族長であるアルキアンドの屋敷。

その中でもとりわけ広い食堂に村の主立った者達が勢揃いしていた。

「辺境護民官だど？なぜ今になってこんなモノが派遣されてくるのだ。」

長老と思しき人物がつぶやく。

「かれこれ40年以上もそんなモノは来なかったのに。」

若者が発した戸惑いの声に、周囲の者達も頷く。

正式な形で発出された、族長宛の依頼文。

そこには辺境護民官を任じ、クリフォナ地域の担当者として派遣する旨が記されており、アルキアンドに便宜を図るべく要請されていた。

辺境護民官と雖も管轄を持つ帝国の官吏であり、以前はともかく現在は帝国の治外に有るアルマール族がこれに従う必要は全く無い。そうであるが故の依頼文なのだが、出して来た相手はあの強大な帝国の行政府である。

無碍にする事も出来ない。

夜もかなり遅いが誰一人帰ると言い出すものは無く、村は静かな興奮に包まれていた。

アルマール族はクリフォナム人に属する部族で、北方辺境の最南部に位置する南クリフォナ領域を生活圏としている為、早くから帝国を始めとする、内海沿岸のセトリア諸国と交流が深く、クリフォナムの民の中でも文化習俗共に比較的帝国寄りである。

もともと、協調路線を目指すアルマール族の思惑は外れ、ここ最近では退廃し始めた帝国との交流は上手くいっているとは言えず、帝国の威圧的な外交姿勢とその帝国人による横暴や進出に悩まされる辺境の一部族に成り下がっていた。

一時はセトリア諸国や帝国の前身であるハリア王国と対等な同盟関係を結び、北方辺境に睨みを効かせた時代もあったものの、時代が過ぎるにつれ、部族は帝国からもたらされた文明と疫病、そして様々な要因による帝国への人口流出で勢力を失った。

その後は辺境護民官の赴任の後、帝国州の設置がなされ平和的に帝国へと編入されるかに見えたが、40年前に起こったクリフォナムの民の帝国への大反乱によって他の部族に引き摺られる形ではあったが、一応の自治を取り戻す。

今は中部クリフォナにおいて一大勢力となっている、アルフォード英雄王率いるフリード族に一応の臣従を誓う一方で、帝国側の態度で幾度となく破綻寸前まで至りながら、協調的な交流をなんとか保つことで均衡を図り、比較的平和な時代が続いていた。

そこへ降って沸いた帝国からの依頼文である。

40年前の反乱で陣頭に立ち、帝国の勢力を州設置前の国境まで押し戻した英雄王がこれを知ればどう思うか。

穏健派であるアルキアンドから見てもこの依頼文は些か乱暴であり、ともに文面だけを受け取れば、どう考えてもクリフォナムの民を挑発していると思えない。

「帝国はいったい何を考えているのじゃ・・・戦争をしたいのか？」  
そんな情勢に無いのはお互い様である。

帝国は軍内部の派閥争いに皇族と官吏が加わり腐敗と混沌が浸透

しつつある。

一方、クリフォナムは老いた英雄王の後継者問題が持ち上がっている。

かつてアルフォード王と共に帝国と戦った事のある長老は深いため息を吐き、上質な羊皮紙で作成された厄介事の種を恨めしげに見つめる。

「・・・往事の勢いを失ったとはいえ、帝国は帝国だ、どんな謀略を凝らしているか分かったもんじゃあ無い、一度英雄王にお伺いを立てるべきじゃ。」

「いや、ここは帝国に従う方が良い！」

長老の一人が見解を開陳し、それに血気盛んな青年が反論したことで、アルキアンドの屋敷はたちまち議論の渦に巻き込まれ、一瞬で白熱した。

聞いている限りは、英雄王の意を酌み、護民官を拒否するという意見と、帝国に従い、護民官を受け入れるべきであるという意見が対立している。

アルキアンドはしばらく熱心に議論する人々の様子を伺い、意見が集約されるのを待つ。「どうするかもう、長よ。」

やがて議論は自然と下火になり、最初に発言した長老がアルキアンドに決を求めた。

「・・・帝国からの通知を見る限りでは、我々に対して護民官の受け入れは求めている、ただ、かつて帝国が拠点としていた、シレンティウムに赴任する旨が記されている。」

「しかし、あのような場所に人が住めるわけがなからう、結局は最寄りの我らが面倒を見る事になるではないか。」

シレンティウムとは村の西南方向に有る帝国都市の廃墟で、かつて帝国の最北の州として栄えたクリフォナ・スペリオール州の州都ハルモニウムのことである。

調和の都市と言う意味で名付けられたハルモニウムは大陸陸路の中枢として栄え、その繁栄ぶりからカプト・ノムル（北の都）とも

呼ばれた。

北はクリフォナムの民が、西からはオランの民が、東は東照の商人達がはるばる沙漠と大森林を超え、東南からはシルーハの隊商が、そして南からは帝国の文物が集まり、世界の都と称された帝都に勝るとも劣らない殷賑ぶりを内外に謳われていたのである。

しかし40年前のクリフォナムの大反乱で、帝都の尖兵たるハルモニウムはクリフォナムの英雄王ことアルフォードの猛攻を受ける。都市警護の帝国第21軍団は果敢に戦うも衆寡敵せず全滅、ハルモニウムも陥落し、クリフォナ・スペリオール州は事実上消失してしまった。

それでも3日で陥落と言われた都市を5ヶ月にわたって守り、最後は満身創痍でアルフォード王に一騎打ちを挑み、激闘の末敗れたアルトリウス軍団長の逸話は帝国で今も語り継がれている。

今はシレンティウム（静寂の都）と呼ばれ、死霊悪霊が真つ昼間から屯する禍々しい残骸が残るのみ、帝国は書面や地図上では、クリフォナ・スペリオール州を未だ記載し続けているものの既にその事実失われて久しく、帝国の財宝探しや腕試しに訪れる以外に人の寄りつかない廃棄都市である。

何かに気が付いた長老がアルキアンドに顔を向けた。

「もしや・・・左遷か？」

その言葉に頷くアルキアンド。

文章の端々に、面倒を見てやって欲しいが余り構う必要は無いといった雰囲気がいじみ出ている。

帝国内部では日常茶飯事と化している官吏や軍人の諍いや出世争いは辺境にまで轟いていた。

「・・・特に軍や官吏を連れて来て州を復活させるといふ訳でもなさそうだが、アルフォード王に知らせる必要はあるだろうが、受け入れて良いと思う、既にこちらに向かつてもいるようだ。」

「ふむ、1年か2年我慢するしかないか・・・」



若者の言葉に大勢は決し、アルキアンドは直ぐさま帝国の文章を  
持たせた使者をアルフォード王に発する。

そして辺境護民官を受け入れる準備を始めたのであった。

### 序章 その3（後書き）

アルトリウスという名前が好きなので、過去の英雄として登場して貰いました。

12月12日、前段を入れ忘れていましたので追加です。

## 第1章 シレンティウムの亡霊 その1

静寂を二つ名に持つ廃棄都市に、時ならぬ闘気が満ちた。

がつん

ぎん

ばしっ

ごっ！ぎいんっ

剣を激しく打ち合う音が響き渡り、2人の男がそれぞれ鋭い斬撃を放ち合った後に一旦間合いを取る。

場所はシレンティウムの行政区にある闘技場跡。

がっ

再度2つの人影が激しく打ち合い、そして離れる。

『ふむ、なかなかの腕前だな、しかしまだ甘い！それでは臣民を守る事などできんぞ！新任辺境護民官！！』

「くっ・・・とづくに引退しているくせに元気だな！」

『何の！後輩を鍛える事は先達の勤め、我は現役時代に勤めを果たせなかった身であるからな！今度こそは勤めを十分に果たそうぞ！』

「ちよっ・・・！このっ！！」

ずわっ！！

鋭い突きを受けて後ずさるハルを追撃するのは古風な鎧兜の男。深紅のマントを翻し、鎧兜の男は渦を巻くような鋭い突きを再び繰り出す。

突きを刀でいなし、自分の懐へ引き込み体勢を崩そうとしたハルの意図に気付いた鎧兜の男は身体を止め、素早く剣を引く。

鎧兜の男が引いた隙を突き、一足飛びに追うハル。

ハルの全体重が乗った上段からの振り下ろし。

がいん！

唸る刃が鎧兜の男の脳天に迫るが、男は剣を斜に構え、すさまじ

い膂力で斬撃を受け止めた。

ぎりぎりと剣と刀がせめぎ合い、火花を散らす鏖迫り合いとなる。  
『おおっ！良いぞ、今のは良い！！あのまま釣られて突きを撃つておれば後首を叩かれて死んでおる所だったわ！』

「・・・もう死んでいくせに何という奴だ！！さつさと逝けっ！  
！」

『栄えある前任者に対する口の利き方がなっておらんな、鍛え甲斐のある奴よ、我が礼儀作法からみっちり仕込んでやろうぞ！！』

どがん

ハルは思い切り力任せに刀を押し上げて隙間をつくり、鎧兜の男に足蹴りをかませて強引に離れると、刀の切っ先を突きつけて叫ぶ。  
「英雄アルトリウスが天に召されず彷徨っていると知ったら帝国中の子供が幻滅するぞ！」

『うわはははっ！我死んで護国の鬼とならん！子供達は泣いて喜ぶだろう！！！！』

長剣を目の前でかざし、豪快にハルの言葉を笑い飛ばした英雄アルトリウス。

足はぼやけてはつきりせず、背後の景色はその身体を通して見る事が出来る。

あまつさえ周囲には青い火の玉が3つ灯ってもいる。

アルトリウスの透けた身体に力が漲り、ハルは緊張しながら腕に力を込める。

『それではゆくぞ！！』

「くっ！厄介なっ！！」

アルトリウスの気合いに応じハルは刀を正眼に構えた。

ハルとエルレイシアがアルキアンドの待つアルマール村に到着したのは昼過ぎ。

直ぐに村長兼族長であるアルキアンドが出迎え、その案内でアルキアンドの屋敷へと招かれた。

ハルが1人では無く、エルレイシアを伴って村に来た事に村人は一様に驚き、そして戸惑った。

屋敷で食堂に通されたハルは、アルキアンドから一つの追加命令書を受け取った。

「なるほど・・・ハルモニウム、今は静寂の都か。」

ハルはアルキアンドから自分宛に届いた帝国からの命令書を見てつぶやく。

アルキアンドは依頼書とは別にハル宛ての追加命令書も預かっていた。

手紙や配達物は帝国や周辺諸国を含めて伝達網が整備されており、かつて州が置かれていたアルマール族の領域でも未だその利便性から利用されている。

帝国も自前の配達組織を持っているが、機密性の薄い外交文書や内務文書は西方郵便協会を使う事が多い。

早馬や伝書鳥を含め郵便従事員を使った郵便網はなかなか上手く機能しており、アルキアンドの元へも郵便従事員が直接手渡しに来た。

またこれとは別に配達に時間のかかる場所へは伝送石を使う。

伝送石は分割が可能で、1つの伝送石に文書を写し込むと、分割された伝送石に文書が伝送されるという不思議な特性を持つ。

相互通信が可能で、またどんなに離れていてもこの特性は失われず、遠隔地への伝達には利便性を発する一方で機密性には欠ける。

その機密性を一定に保つ為、国家組織とは分離した郵便協会が設立されたのである。

郵便協会は伝送石伝達以外の配達や輸送にも携わっており、今回のように機密性はそれ程でも無いが、他に知られては困るという程度の文書については直接専従員が配達する。

そうして届けられた追加命令書には、かつて帝国が北の備えとして設置したハルモニウムへの拠点設置と、都市機能の復興を命じていた。

「静寂の都・・・ですか？」

「ああ、今はそう呼ばれていると聞いたが・・・」

エルレイシアの問い掛けに、ハルは重いため息をつく。

既に40年が経ったとはいえ、帝国とクリフォナム人が激戦を繰り広げた古戦場である。そしてかつては帝国の尖兵都市としての役割を果たしていた都市で、帝国人は全滅して既に居ないが、多くのクリフォナム人が命を散らして帝国を押し返した象徴ともいえる都市を復活させるというのは、如何なものか。

帝国はクリフォナム人を尊重していないという印象を与えかねない。

戦いがあつたのは100年1千年前の話では無くただか40年前の事。

戦いを憶えている者も多いだろうし現に戦いへ参加し、存命している者も多いだろう。

帝国とクリフォナム人は疎遠ではあるけれども、今の帝国に戦争を起こす意思はないのだから、国境安定の為に隣人を余り刺激しない方がよいはずである。

「うつつ、これが左遷か・・・。」

改めて自分の置かれた立場を思うハルが文書を手にしたままがっくり肩を落とすと、エルレイシアがそっと寄り添ってハルの肩を抱いた。

「静寂の都市が私たちの新居なのですね、2人きりの生活、嬉しいです。」

心持ちうつとりとした表情のエルレイシア。

鼻息も微妙に荒い。

「・・・何時まで付いてくるつもりなんだ。」

顔を上げて半眼で睨むハルの顔を不思議そうに見返し、エルレイシアはさらりと答えた。

「え？何を言っているのですか？ずっとですよ。」

「・・・勘弁してくれ。」

ハルが視察と物資調達と称して若者を連れ、村の見物に出かけてしまった隙を逃さず、アルキアンドはエルレイシアに対して心配そうに話しかける。

「神官様、どうして帝国人と旅路を共にされているのでしょうか？」

「途中賊徒に拐かされた私を助けてくれたのです、尤も私を拐かしたのも帝国人ではありませんたけれども。」

「・・・まさか、帝国人が蛮族と蔑む私たちの命を助けるような事を？しかも奴は官吏ですぞ？」

巡検と言いつつ村々を回り、貢納を要求してくる帝国兵や追従する官吏にほとほと嫌気が差しているアルキアンドは、エルレイシアの言葉を信じられずに反駁する。

「いえ、事実です、私の荷を取り戻してくれたばかりか、結符を受けてくれました。」

腕で出された白湯を両手で持ち、優雅に喫していたエルレイシアはほんのり頬を赤く染めて言い足す。

その様子にも軽く驚きつつ、アルキアンドは思わず声を大きくした。

「！！何と、神官様の結符を！？ではあの黄色い符は見間違いでは無かったのか！」

「はい。」

嬉しそうに答えるエルレイシア。

「しかし・・・王は憤られるでしょうな・・・。」

「これも運命です。」

アルキアンドの思案顔に、エルレイシアは意に介した様子も無く答えた。

アルキアンドの屋敷にてしばらく逗留する事となったハルとエルレイシアは、翌朝旅支度を調べて屋敷を出た。

ハルは弓矢を背負い、刀を腰に差し、エルレイシアは櫂の木の杖を持ち、またそれぞれの背中には2日分の食料や生活具の入った背囊がある。

「とりあえず、赴任地に行つてどういう状態なのかを見極めたい。」

ハルはアルキアンドに淡々と告げて出発した。

エルレイシアはもちろん道案内である。

滅びた北の都ハルモニア。

今は静寂都市シレンティウムと呼ばれる廃棄都市は、アルマールの村から西南に歩いて半日の割合近い場所にある。

廃墟の大部分は戦争後に破壊され、利用できる石材や建材は持ち去られてしまっている。

残っているのは第21軍団が駐屯していた基地の一部と、行政区であつた一角だけで盛時の10分の1以下の範囲でしか無い。

しかしながらその周囲は戦死者の死霊が屯し、獰猛な魔物や獣が徘徊する危険地帯である事から、地元のアルマール族すら滅多な事では近寄らない。

流石に日の高い内から死霊は現われなかったが、魔物や獣はちよくちよくハル達の進路に出現する。

ハルは出来るだけ隠れたり進路を変えたりとやり過ごす方を選んだが、避けようのない時は弓と刀を使って排除する。

「死霊が出ないのであれば私は余りお役に立てませんね。」

そう言いつつもエルレイシアは頑丈な櫂の杖で飛びかかる魔物を打ち据え、短い詠唱の後放った光線魔法で魔鳥を打ち落とす。

「・・・何でその腕前で盗賊に捕まったんだ？」

「油断していたのです、気が付いたら縛られていました。」

「・・・そうか。」

落ちた魔鳥を回収しながら、ハルは脱力して答えた。

予想外に早くシレンティウムに到着した2人は、早速遺構の調査



を始めたが、目新しいものは何も無かった。

戦争で滅びたにしては破壊された跡や焼け焦げた跡も無く、綺麗な状態で保存されている建物に石畳の道路、排水溝には土砂が溜まっ  
つてはいるものの、溝そのものは破損が無い。

また、行政区を防備する為に築かれたと思われる内部城壁も人の背の高さ程度まで残っており、ハルは不思議な印象を受ける。

「私も以前来た事がありますが・・・やはり奇妙ですね、いつ見ても綺麗に保たれています。」

草木は生い茂ってはいるものの、道路に植えられていた街路樹が大きく  
なっただけであろ、無節操にあちこちから生え出しているような感じでは無い。

ただ人が入った形跡は一切無く、たき火をしたり、野営をしたと思しき痕跡は見つける事が出来なかったので、余計に不自然な感じがするのである。

しばらく遺跡を歩き回り、軍団基地の一角にさしかかった時、突然、ハルは背後に人の気配を感じて振り返る。

エルレイシアもハルには無く、人の気配に驚き同じ方向に振り返った。

『おう、帝国人が・・・懐かしいな、40年以上ぶりだ。』

銀色の鎧兜に身を固めた帝国軍上級将校の姿がそこにはあった。

エルレイシアが必死にハルの袖を引くが、ハルは奇妙さよりも懐かしさが高じて笑顔を浮かべると名乗りを上げた。

「帝国北方辺境担当、辺境護民官ハル・アキルシウスです。」

『ふむ、高位文官なのか、御丁寧に痛み入る、我は帝国北方守備軍司令官にして、栄えある第21軍団軍団長のガイウス・アルトリウスである。』

ハルの笑顔が凍り付いた。

## 第1章 シレンティウムの亡霊 その1（後書き）

帝国の英雄登場です。

## 第1章 シレンティウムの亡霊 その2

「・・・嘘だろう？」

『嘘では無い、尤も未だ生があるとは言わぬよ、我が身は既に此の世のものでは無い。』

まだ日は高い。

しかし、ハルの前には確かに古めかしい鎧兜をまとった男がおり、その姿はハルだけでなくエルレイシアの目にも映っている。

エルレイシアは、額に冷たい汗を流し、握りしめていたハルの袖を強く引く。

「ハル・・・あれは人ではありません、太陽光を浴びて平気で、しかもまともな意志を保っているというのは希有な例ですが、死人の霊体です。」

「本物が・・・。」

ハルの額にも冷たい汗が流れる。

しかし、その男は目の前の2人の様子が変わった事に余り頓着した様子も無く話を続ける。

『まあ、信じられぬのも無理は無い、お主がまだ生まれてもおらぬ時代に此の地を統べていた者であるが・・・戦に敗れたのだ。』

「その話は知っている、敵も美事に戦った英雄アルトリウスを讃え、丁重に遺骸を清めて帝国に送り返し、英雄は帝都の廟に祀られたとある。」

かろうじてハルがそう返すと、アルトリウスは口を皮肉にゆがめた。

『ふん、そのような世迷い事を言ったのは帝国のあほ貴族共だろう？平民で被征服地出身の我がそのような厚遇を受ける訳が無い、我が身は既に身は朽ち果てたが墓所と棺は此の奥にある、見てみるか？』

「い、いや、構わない。」

『そうか？・・・まあ良い、40年ぶりの客だ、歓待しよう、こちらへ来るといい。』

踵を返すアルトリウス。

ハルとエルレイシアは一瞬顔を見合わせるが、ハルがぐつと頷くと、エルレイシアもこくりと頷き、アルトリウスの後を追った。

軍団司令室と思われる建物に導かれたハルとエルレイシアは、アルトリウスに勧められるまま石造りの椅子に座る。

『それで、辺境護民官を寄越したと言う事は帝国に此の州を復興させる決心が付いたと言う事であるかな？』

「いや、そう言う訳では・・・」

アルトリウスは律儀に自分の執務机に回り込んで腰掛けると徐に切り出した。

しかし、ハルはアルトリウスの問い掛けに口を濁す。

アルトリウスの顔が僅かな笑顔から怪訝なものへと変わる。

『・・・辺境護民官とはいえ、後任を寄越したと言う事は我はお役ご免であろう？』

「と、そういうことになるか。」

肌身離さず持ち歩いている命令書と追加命令書を取り出しながらハルが言う。

帝国では役職が消滅したり、非違行為があつて解任される以外、後任者が命令書を持参して赴任地に到着し、引き継ぎを終了した時点で前任者は自然に役職を解かれる事になっている。

引き継ぎ期間は、赴任先や役職の特殊性に鑑みて期間は長短することがあるものの、原則は1週間である。

『我も職務を引き継ぎたかったのだが、我の責任とはいえ州は無くなったのに、皇帝陛下は解任して下さらないのだ。』

確か英雄アルトリウスを讃え、消滅した北方守備軍司令官と第21軍団軍団長はそのままアルトリウスが任じられ続けている。

毎年行われる高位官の任官式で、英雄アルトリウスと東照帝国と

の戦いで勝利しながらも戦死したりキニウス將軍は一番最初に名を読み上げられており、ハルはその事を思い出した。

「律儀だな。」

『何を言うか、帝国軍人であれば職務を果たすのは当然の事だ．．．尤も我は途中でしくじってしまったのであるがな、職責を全うしたとは口が裂けても言えん．．．だが、後任者がこうしてきたからには、我もようやく任務から解除されると言う事だ！』

アルトリウスは音も無く立ち上がるとすいっと人間ではあり得ない挙動でハルに迫る。

ぎよつとして身を引くハルとエルレイシアを意に介せず、アルトリウスはぎらつく目でハルの手元を指さした。

『さあ、引継書を渡して貰おう！命令書を持っているのだから当然持っているだろう？過不足無く引継が出来るよう都市は清潔に保って置いたぞ！』

「引継書は無い、俺の任務は誰からも引継を受けないからだ。」

アルトリウスの異常とも言える剣幕に若干引き気味に答えるハル。

『何？』

「俺は左遷されてここへ来たんだ、引き継がれるような任務も役職も無い。」

鋭く問い返すアルトリウスに、ハルはやけくそ気味に答える。

『さ、左遷だと．．．な、何と言う事だ．．．このような重大極まりない地を放置し、あまつさえ左遷官吏を派遣するとは．．．帝国のあほ貴族共め！』

鬼の形相となるアルトリウス。

ぶわっ

アルトリウスの背後から鬼火が立ち上がり、周囲の床からは帝国兵の亡霊達がぼこりぼこりと立ち上がり始める。

剣を抜き、破れた鎧兜を身にまとった兵士達が周囲を埋め尽くす。素早くハルは刀を抜くが、亡霊相手に効果があるかどうか迷い、

切り付ける事に躊躇した。

「地に彷徨う霊よ、安らかなる眠りを天にて得られん事を・・・清浄！」

シャアアアア

エルレイシアはとつさに杖を構え、浄化の呪文を唱える。

たちまちどこからともなく太陽光が降り注ぎ、周囲を明るくそして暖かく照らす。

『・・・クリフォナムの太陽神官殿か、なかなか強力な術であるが、我には効かん、帝国皇帝から毎年任官式に名を借り、呪いを新たにされ、此の地に縛られ続ける我にはな。』

アルトリウスは鬼火を伴いながらも悲しげに降り注ぐ太陽光に身を任すが、その姿は留まり続け、やがて太陽光が途切れる。

現われた兵士達も全員が顔をゆがめ、悔しそくに下を向くばかりで襲って来るような様子は無い。

「まさか任官式にそのような呪が込められていたとは。」

『我も此の身になって初めて知った、東照国境のリキニウス殿もさぞかし悔やんでおろう、帝国に尽くしたが故に帝国の盾にされ続ける羽目になろうとはな・・・』

ハルが絶句したことに對して自嘲気味に答えるアルトリウス。

その様子に先程までの鬼気迫る雰囲気は無い。

「・・・どうにかならないのか。」

「私にこれ以上のことは・・・先程の清浄術は最大に力を入れたのですが・・・」

思わずエルレイシアへ尋ねるハルであったが、エルレイシアは些か疲れた様子で答えた。

「すまん。」

『御主が謝る事ではあるまい、まあ、我も最初此処へ来た時は左遷であった、お仲間と言う事だ・・・ふむ、では最後に一つ手合わせを頼もう、不甲斐ない前任者からの贈り物だ。』

「いや、遠慮する。」

『何を遠慮する事がある？構わんからこつちへ来い、闘技場があるのだ。』

「いや、やらんぞ。」

『・・・そう言われると意地でも試したくなるものでな、まあ、付き合え、手加減はしてやる。』

「・・・やらないって言ってるだろう。」

『・・・』

「・・・」

『・・・おい貴様ら、辺境護民官殿を丁重に闘技場へお連れしろ。』

ざざっ

兵士達が無言でハルとエルレイシアを囲む。

「ハ、ハル・・・」

兵士達の際の無い動きに怯えるエルレイシア。

自分の術が効かない相手である事もあるのだろう、心細そうにハルへぴつたりと寄り添う。

「・・・。」

脱出する事は出来そうに無い事を見て取り、ハルはあきらめのため息をついた。

## 第1章 シレンティウムの亡霊 その2（後書き）

感想や誤字脱字指摘是非宜しくお願いいたします。



## 第1章 シレンティウムの亡霊 その3

『ここが我が闘技場だ！なかなか良いだろう。』

アルトリウスらに連れられてきたのは、軍団基地の北端に位置する闘技場跡地。

跡地というには些か清掃が行き届き過ぎているくらいはあるものの、人が使っていない以上は、例え人であったモノが使っていたとしても跡地と言うほか無いだろう。

『貴官は闘気術を得ておるか？』

「ああ、あなたに効くかどうかは分からないが・・・」

アルトリウスの問いに対してハルは自信なさげに答える。

闘気術とは剣や拳に自分の闘気や戦意を込めて戦う術で、普段であれば剣の切れ味が増したり、剣や拳が直接触れられないような存在にもダメージを与える事が出来る。

達人といわれる練度に達して初めて得られる術であるが、ハルは故郷でも十本の指に入る程の剣士であり、格闘家である。

当然会得はしているが、死霊と戦った事はもちろん無い。

『やはりな、我の目に狂いは無かった、なに、会得しておるのであれば問題あるまい、我に触れる事が出来れば良いのだからな。』

「・・・そう言うあなたはどうなんだ？」

ハルが疑問を呈すると、アルトリウスはにと口角を上げて笑う。  
『愚問であろう、我を誰と心得る？我は英雄アルトリウスぞ！我が剣こそ白の聖剣、身は滅せども武力と刃は衰えておらぬ。』

アルトリウスとハルは一瞬視線を絡み合わせた後、闘技場の床に赤煉瓦で示された開始線へと付く。

しゅらん

心底愉しそうにアルトリウスがしめやかな冷気をまとう剣を抜き放ち、声を上げた。

『では、新任辺境護民官殿の歓迎を兼ねた剣闘試合を開催する！』

ハルはため息を一つつくと、エルレイシアが亡霊兵士達に監視されながらも無事な様子を目に留め、すつと腰の刀を抜いた。

『帝国直轄領アルビオニウス州がカストルムの城主、ガイウス・アルトリウス！』

その様子を見て満足そうに頷いたアルトリウスは、びしつと剣を立て、名乗りを上げる。

「・・・帝国新領ク州アキルシウス郷の地士、秋留晴義。」

ハルは刀を肩口に構え静かに名乗りを上げた。

ハルの名乗りに片眉を上げるアルトリウス。

『ほう、群島嶼連合の剣士か・・・なかなか強力であるとの噂を聞いてはいたが、手合わせするのは初めてだな・・・しかし新領とは、群島嶼連合も遂に帝国に降されたか・・・』

「不本意ながらな・・・。」

苦い物を口に含んだような顔で答えるハル。

アルトリウスはその様子に何か感じる所があったのか、それまでの勢いある態度を改め、神妙に剣を構えた。

『では始めようか、ヤマトの剣士！』

アルトリウスが薄れた足で地を蹴り、ハルに躍りかかった。

ばきつつ・・・

がっ がっきいん

強力で押してくるアルトリウスをいなし、かわし、さばきつつ時折鋭く反撃を加えるハル。

次第にその撃剣は舞のような華やかさを帯び始め、エルレイシアはもとより周囲を囲む亡霊兵士達も何時しかアルトリウスとハルの試合に見入ってしまう。

『うわははは！ここまでやるとは思わなかったぞ！！やるなヤマトの剣士よ！！』

「・・・英雄から褒められると悪い気はしないな。」

何度が目になる間合いを取った瞬間に言葉を交わす2人。

『ふんむっ！！！』

「くっ！」

ごきん

互いの剣と刀を打ち合い、離れた後、2人は自然と距離を取る。

『・・・ふふふふ、試合はここまでにしよう、実に愉快的な時間であった、礼を言うぞ！！』

「ああ、こちらこそ、ここまで必死に戦ったのは久しぶりだ・・・」  
アルトリウスが涼しい顔で宣言すると、ハルは肩で息をしながら応える。

互いに開始線まで戻ると、一礼を交わして剣と刀を鞘に収めた。  
満足そうな笑みを浮かべる2人。

ハルはどっかりと開始線にへたり込む。

「ハル！」

試合が終わり、亡霊兵士達が包囲することを止めたため、エルレイシアはハルの下に駆け寄った。

「ああ、エルレイシア大丈夫だったか？」

「ええ、兵士さん達は私に指一本触れていません。」

「そうか・・・」

確認はしていたが改めて無事を聞き、安堵の声を出すハル。

「ハルこそ、大丈夫でしたか？怪我をしていませんか？」

「ああ、大丈夫だ、随分手加減されていたみたいだ。」

ぺたぺたとハルの身体を触りまくるエルレイシアの頭を軽く撫で、嬉しそうに驚くエルレイシアを余所にアルトリウスを見るハル。

『仲が良いな。』

「あゝそんな事は・・・」

「はい！」

アルトリウスの言葉を否定しようとしたハルの言葉を遮り、へたり込んだハルに抱きつくエルレイシア。

ハルはとつさにふりほどこうとするが、力を使い果たして果たせない。

アルトリウスは少しうらやましそうな顔をした後、気を取り直して口を開いた。

『・・・まあ、武力についてはそう卑下したものでは無いな、辺境護民官殿は我が戦った強者の中でも3番目の内に入るだろう。』

「あゝ光栄だが・・・もうこれっきりにして欲しいな。」

ハルの言葉にアルトリウスは頷く。

『うむ、心配せずとも良い、これで我が願いは成就された。』

アルトリウスの敵かな声と共に、闘技場の周囲に静かな光が満ちる。

「これは・・・？どういう事だアルトリウス！」

闘技場の周囲から満ち始めた光はやがて都市の遺跡全体を覆い尽くす。

都市の様子を満足げに眺めるアルトリウス。

『なに・・・我が第21軍団の引き継ぎ式が終了したのだ。』

「！？」

エルレイシアにかじりつかれたまま驚くハルにアルトリウスは視線を戻す。

『実は新任軍団長と前軍団長で手合わせを行うのが我が軍団伝統の引き継ぎ式なのだ、我も前任者より手荒い歓迎受けた、懐かしい思い出だ。』

それまでの意気揚々とした様子はなりを潜め、落ち着いた武人の姿がそこにあった。

アルトリウスは視線を亡霊兵士達へと向ける。

ハルとエルレイシアが視線に釣られて目を向けると、兵士達が都市中から続々と闘技場へ集まってきた。

『悪いな、ハルヨシ、これで我を含めた第21軍団の御主の指揮下

へ入った、そこで、だ、頼みがある。』

「・・・頼みとはなんだ？」

薄々アルトリウスの意図に気が付いたハルは、しかしその頼みの内容を尋ねた。

『長年此の地に縛られていた兵士達を解放してやって欲しいのだ。』  
「・・・。」

ハルの予想通りの答えを口にするアルトリウス。

『都市を失陥させたのは私の責任であるが、私の拙い指揮に従い、最善を尽くして命を散らした兵士達に責任は無い・・・どうか故郷へと帰してやってくれぬか？兵士達が我に伴い呪を受けるのは理不尽極まりない所行だ、このとおりだ。』

淡い光に包まれたアルトリウスは真摯な様子でハルに懇願し、頭を下げる。

『頼む、聞き届けてくれ！』

しばし整列を始めた兵士達の様子と頭を下げるアルトリウスをぼんやり眺めていたハルは、かじりついていたエルレイシアを優しく離して立ち上がった。

ハルはエルレイシアに一旦下がるように示し、アルトリウスを頂点に整列を完了した亡霊兵士達の頂点に立つ。

そしてしっかりとアルトリウスを見据えて命令を下した。

「アルトリウス前軍団長、人員報告を。」

『・・・っ！おう！帝国北方守備軍司令部及び直轄、帝国第21軍団総員834名！欠員なし！現在総員834名整列完了！！！』

予感に身を震わせ、アルトリウスがハルへ最後の人員報告を行う。  
「軍団長代行職、ハル・アキルシウス辺境護民官の権限にて命を降す・・・40年間もの長きに渡る任務、みんなご苦労だった、第21軍団は本日をもって解隊、各兵士は速やかに復員せよ。」

パアアアア

ハルの言葉に亡霊兵士達は一様に歓喜の表情を浮かべ、一瞬後、

強い光を放ちながら次々と消える。

『ありがとう、最大限の感謝を送る・・・貴官の前途に幸多からんことを祈っている。』

## 第1章 シレンティウムの亡霊 その4

最後の兵士が敬礼を残して光の中に消え去る。

全員がハルと目を合わせ、感謝の笑顔を残して消え去った。

「・・・感謝か・・・」

834名分の感謝。

自分が特別な事を為したとは思えない。

ただ自分が出来た事をやっただけ。

でもそれが人の幸せにつながる事ならば、こんな良い事は無い。

今回は既に人では無くなってしまった者達だったが、40年ぶりの故郷にどのような思いを抱くだろうか。

「・・・で、あんたは逝かないのか？」

そして、そのきっかけを作った過去の英雄にハルは目をやった。

「あ？我か？」

兜の脇から器用に指を差し込み、アルトリウスは耳をかきながら不思議そうに言った。

「任務は解除しただろう？」

「うむ、任務は解除された、つまり我は自由と言う事だ。逝かぬというのも自由の内ではないか？」

「・・・なんださっきの思わせぶりの言葉は？」

「あれか？あれは兵士達の言葉を代弁しただけだ、彼らは意志を保ち続ける代償として言葉を失ってしまったからな。」

ハルの言葉にアルトリウスは悪びれずに答える。

びきつとハルの額に青筋が浮かんだ。

「で？」

「勤めは解除されたとはいえ、我には前任者としての責任がある、もちろん、誇りだって、ある。」

「だから、なんだよ。」

『栄えある前任者として、貴官の力になってやろう！』

「・・・いいからさっさと逝け！！」

両手を広げてマントを翻し、自身満々に宣言するアルトリウス。その様子に苛立たしさを隠そうともせずハルが言い放つものの、アルトリウスはまるで意に介した様子を見せない。

エルレイシアは完全に観客となつて2人？の遣り取りを見守っている。

「助けは要らない。」

再度きつぱり断るハルであつたが、アルトリウスがどうして断るのか分からないと言つた様子で腕を組み、右手を顎に添えた。

『ふむ、先程も言つたが、栄えある前任者に対する敬意が無いな、それでは駄目だ、やはり先達の指導が必要と見た！』

「いらん。」

ずばつと顎に添えていた手を突き出して人差し指でハルを示し、アルトリウスは力強く言うが、ハルは間髪入れずに拒絶する。

『・・・ま、まあ、そう無碍にするものではない、それでも現役時代に此の地を統べておつたのだ、我は色々と知っておる故に、役立つと思うぞ？』

「・・・例えばどんな風に役立つんだ？」

余りのすげなさに焦りを感じたアルトリウスは、それまでと少し違つた説得するような様子でハルに話しかける。

その言葉にハルは少しばかり考えてみる氣になつた。

確かに、地理不案内である上に何の寄る辺も無い身の上である、生活の為に周囲の地理や情勢氣候等の知識は必要だ。

死霊とはいえ、理性を残して死霊化しているらしいアルトリウスに禍々しさは無く、呪われる心配はなさそうである。

例え何か狙いがあるにしても、40年前の出来事では、ハルやエルレイシアに関わる事では無い。

ハルの僅かな心変わりを察したのか、アルトリウスが語る。

『うむ、貴官の仕事の役に立つ知識というのであれば・・・この地



にあつた農業用地であるとか栽培作物やその栽培方法であるとか、鉱物資源や薬草などの自然資源の分布、それから埋もれてしまった旧街道の場所に、残っている都市の構成、周辺部族や民族の風俗、気性や勢力範囲などといったところか、ざっとでこのようなものだな！」

40年前とはいえこの地を統治して成功を収めていたアルトリウスの知識や経験は、この地を復興させるのであれば、確かに生かせるだろう。

しかし、ハルはこの地で仕事をする気は無かつた。

帝都に戻る見込みの無い以上、取り敢ずはこの地で生きていかなくてはならない。

その為の知識を求めただけである。

今アルトリウスが語った知識はハルにとって必要では無い。

「・・・俺は左遷されたんだ、仕事なんてあるわけ無いだろう。」

『そんな事はあるまい、左遷とは言うが、貴官も帝国の高位文官に違いないのだ、仕事が無いわけではない、例え無理難題とはいえそれも一つの仕事、おろそかにして良いわけは無い、一見果たせない命令であつたとしてもそれを為すべく勤め、全力を尽くすのが帝国官吏としてあるべき姿であらう。』

アルトリウスはくさるハルに官吏道を説くが、ハルはうさんくさそうに尋ねる。

「自分も左遷されたんだろう？」

『うむ、我も左遷された、平民の身で活躍し過ぎたのでな、御主の気持ちは分かるつもりだ。』

「じゃあ、なぜ仕事をしろと言うんだ？」

『・・・我は帝都のあほ貴族に反抗的な兵士を集めた軍団と新設された地方軍司令官の地位を与えられ、クリフォナム人とオラン人の勢力がせめぎ合うこの地へ来たのだ、だが我は職務を放棄しなかつた、それが我の矜持であつたからな、基地を設営し、街道を整備し、各地の商人を呼び寄せて都市を造つた・・・地の利もあつたし、周

辺の部族とは仲良くやっておった故に、わずか10年で北の都と呼ばれるまでに賑わうまでになった。」

懐かしそうに遠くを見る目で語るアルトリウス。

『・・・それ故に滅びたが、それはまた別の事・・・左遷とてそう悪いモノではないぞ！自由はあるし、ここで何をしても文句を言う奴はおらぬ、ましてや御主はほぼ全権を掌握しておる辺境護民官ではないか！そう腐るものではない、我が手伝おう、この地に再び平和と繁栄をもたらそう！！』

最初の言葉は声量が小さく、ハルとエルレイシアの耳には届かなかったが、アルトリウスの言葉は力強くハルを撃つ。

「任務は、何の支援もなしに・・・1人で人の居なくなった都市を復興させるんだぞ？無理に決まっている！任期が終わるまで、ここであとで暮していくだけだ。」

首を左右に振り、アルトリウスの言葉を否定するハル。

しかしその心にはこの地で何かを為すという選択肢がしっかりと刻まれる。

否定の仕方もそれまでのように切って捨てたものではなく、どこか悩みを含み始めたものへと変わってきている事にアルトリウスとエルレイシアは気が付いていた。

そしてハル自身もそれを自覚し始める。

しばらく考え込むハルの肩にそっと触れ、エルレイシアが言葉で背を押す。

「ハル、私も協力します、クリフォナムの太陽神官がいれば、それだけでクリフォナムの民はやってきますから。」

『うむ、それは間違いない、この都市にも太陽神殿を設けアルスハレア神官殿に逗留頂いていたが、参拝や相談に来るクリフォナムの者達がたくさん居た。』

エルレイシアの言葉に同意するアルトリウス。

確かに、アルマール村ではハルよりもエルレイシアに対する歓迎の方が熱が入っていたし、その後もエルレイシアに村人達は何かと

群がっていた。

「ハル1人ではありません、2人です。」

『・・・我もおるのだ、3人であろう？神官殿・・・』

「あ、そうですね。」

エルレイシアとアルトリウスの言葉に、ハルは決意を固める。

「・・・分かった、何処まで出来るか分からないが、やってみる。」

ハルの言葉にアルトリウスは満足げに頷くと

『そう来なくては！ではこちらへ来るが良い。』

ハルとエルレイシアは、アルトリウスの案内で行政区のひときわ立派な建物まで来ると、その中の嚴重に封印された一室へとさらに案内された。

アルトリウスが自分の持つ剣をかざすと、封印は淡い光に包まれた後に解かれた。

『他でも無い、都市の財物を引き渡そう！我は着服などしておらんぞ？しても使い道は無いし、後任者に財務を引き継ぐのは至極当然であるからな！では辺境護民官殿、この扉を開いてくれ。』

「財物？」

アルトリウスの指示に従い、封印が解かれた部屋の扉を開きながら問い返すハル。

重くさび付いた青銅製の扉がハルの手によって開かれる。

びかびかっ

破れた窓から差し込む太陽光に反射し、ハルとエルレイシアの目を射る黄金の光。

まばゆい光に目を細めて部屋の中を見る2人の前には信じられない光景が広がっていた。

「・・・・・・・・！！」

部屋の中の光景に圧倒されるハルとエルレイシア。

部屋には、金の太判金貨がうずたかく積みあげられ、ぎらぎらと強い光を放ち続けている。

『どうだ、すごかろう？この都市に官吏どもが集めていた税が集約されておったのだ、我はむやみに税を集める事など必要ないと抑えておったが、それでも官吏どもめ徴税だけは熱心でな？都市が陥落する直前に全員戦の邪魔だと追い出してしまった後は誰も取りに来るわけも無く、すっかり忘れられてしまった物がそっくり残ってあるのだ、額は大判金貨おおよそ5万枚だ。』

驚く2人に気をよくしたアルトリウスが金の由来を得意げに語った。

「「5万枚！！？」」

金額を聞いてさらに驚く2人。

『おう、もつともこれは帝国から支給された都市の予算や我等の軍事費を除いてだ、それを含めれば、全部で金貨8万5千枚ほどにはなるつか、全て御主に引き渡す、これで不自由はあるまい！』

## 第2章 昔語り アルトリウス編

見事な月が天に昇り、しずしずと周囲を照らす。

保存食料で簡単な食事を終えたハルとエルレイシアは、アルトリウスを交えてのんびりと時を過ごしていた。

場所はアルトリウスがかつて暮っていた執務室兼軍団長私室。

暖炉もあり、40年前の物であるが蝋燭も灯せるので、一夜の宿へと早変わりした。

当のアルトリウスは頓着せず、金庫代わりの部屋を再封印した後は、都市設備の解説や保存物品の調査をハルと共に行って満足げである。

都市には武具や食料の類いも保存されていたが、食料はかつての籠城戦でほとんど使い果たしている上に、封印が上手く機能しておらず、40年の再月が全てを土へと化していた。

武具類は、きっちり封印された武器庫に保存されていたせいか、かなり良い状態で保管されており、型式が古い為にもう使われていないとは言え、しっかりとした鎧兜、剣と槍、帝国風の短弓が矢、弩にその矢がかなりの数あった。

また、その他の建材や資材、日常工具や建築工具、機械工具に留まらず農機具の類いも充実して保存されており、ハルを驚かせる。

『我はこの地を開拓するつもりであったのでな、帝国からは色々せしめてやったのだ。』

アルトリウスが保管庫を開いてハルに見せるにあたって、得意げに語った。

『さて、落ち着いた事でもあるし、昔語りでも致そうか？』

月を窓から眺めていたアルトリウスが突然言い出した。

「そうですね、これから一緒に色々やっていく上で相互の理解は必要だと思います。」

「・・・あまり話す事は無いが。」

「まあ、話したくない部分があるのであれば、話さなければ良いのだ。」

「分かった。」

エルレイシアは賛成し、ハルは少し渋ったが、アルトリウスに説得されて応じる。

「よし、では言い出した我から話そうか。」

アルトリウスは嬉しそうに話し始めた。

ガイウス・アルトリウスは若くして優秀な成績を収めて平民の身でありながら軍将校に取り立てられ、更には初めての赴任先である南部大陸国境において、部族連合軍の襲撃を新造の砦で食い止め、帝国軍南部大侵攻の契機を作り出した。

帝国が南部大陸に本格進出が可能になったのはこの一戦以降で、アルトリウスは功績により平民の身でありながら故郷の城主として貴族階級の末席に連なる。

しかし出世したガイウス・アルトリウスの栄華は長くは続かず、あちこちの閑職をたらい回しにされた挙げ句には、ハルと同じように边境護民官としてクリフォナ南部へと派遣された。

当時クリフォナ南部地域はオラン人とクリフォナム人の係争地域で、人はほとんど住んでおらず、言わば勢力の空白地帯で、帝国はこの状態に目を付けてアルトリウスを送り込んだのである。

上手くいけば儲けもの、帝国の版図が広がる。

失敗すれば、目障りな平民出の優秀な将官を失脚させられるか、最悪彼の地で蛮族によって命を落とす。

そうなくてもそれを口実に戦争を仕掛ける事が出来るのだから、

帝国にとって何一つ損は無いはずだった。

平民の英雄となっていたアルトリウスを無碍に扱う事も出来ず、帝国貴族達が苦慮の末編み出した措置であったが、アルトリウスはこれを奇貨とした。

『平民出で優秀であつたが故に腐らされている奴は結構おつたのだ、そ奴らを誘つた。』

アルトリウスが願い出た条件は、州格上げの暁には州総督を置かず帝国皇帝直轄領として、北方守備軍司令部を設け、アルトリウスが率いる、平民出身者の第21軍団軍団長がその司令官を兼ねる事。また、本来5000人を超える帝国の1個軍団であるが、第21軍団は平民出身者で帝国に不満を持つ者ばかりを集めたけ結果、834名の新造軍団となつた。

アルトリウスはこの軍団を率いてハルモニウムが設けられる地に赴任し、わずか10年で北の都と呼ばれるまでに成長させたのである。

そしてアルトリウスは辺境護民官から北方守備軍司令官に格上げされ、引き続いてハルモニウムを治める事となつた。

『ただ、帝国人は入植させておらん、我はあくまでその地の民を募集した、ハルモニウムを境に西をオラン人、東をクリフォナム人に分け定着させて、その中継地点として帝国の都市であるハルモニウムを使つた、言わば我はオラン人とクリフォナム人の仲介役をやつたわけだ。』

ハルが立ち寄つたアルマール村もそうした村の一つ。

元々は別の地域にいたアルマール人の一派を呼び寄せて定着をして貰つたのであるが、帝国風の農法を伝えられ、また商業を習い覚えた事により発展し、ついにはアルマールの族長を輩出できるまでに大きくなつた。

係争地域は中継地と変貌を遂げ、もともと陸路としては東照やシルーハへの抜け道でもあつたことから、発展は加速し、争いが消えた事で荒蕪地は農地へ、獣道や軍道は街道へと変わる。

アルトリウスは帝国内に入る時以外は関所や鑑札を設けず、都市では自由に商売や流通が出来た事も大きい。

『正直そこは我が疎かったただけなのだがな、怪我の功名という奴だな。』

アルトリウスは悪びれずに言う。

しかし、その発展が帝国中枢から睨まれ、阻害が始められる。

『・・・中央官吏共がこの町の税金に注目し始めたのだ。』

アルトリウスが苦々しげに吐き捨てた。

中央官吏は、帝国直轄領である事を口実に、官吏を送り込んで徴税を始めた。

関所税、住民税、販売者税、城壁税、地税、酒税等々、ありとあらゆる税金がハルモニウムに襲いかかる。

それまでは都市内の住民税と売上税のみで十分貢納に耐えたのであるが、これで一気に貢納額が跳ね上がり、ハルモニウムの徴税額で中央官吏が潤い始めることとなった。

しかし、その官吏と対立している貴族や軍人は中央官吏が力を付ける事を望まなかった。

それまで課されなかった新たな徴税で、オラン人クリフォナム人双方に不満が溜まっていた事も不利に影響した。

帝国が支配していたのはハルモニアとその周辺の僅かな土地であり、オラン人とクリフォナム人の係争地を折半させたと言うのが実情であるが、もともとクリフォナム人の他の部族は帝国に自分達の地が侵攻されたという思いしか無く、実情を理解していない。

そして反乱が起きた。

反乱はクリフォナム人の中でも勇猛で知られるフリード族主導で始まり、アルトリウスが反乱に気が付いた時は既にその影響はクリフォナ・スペリオール州の州域全体に広まっていた。

『支配していたとはとも言えぬ、我はただ点を押さえていただけなのだが、アルフォードには我が諸悪の根源に見えていたのであるうな。』



アルトリウスは都市の住民、ほとんどはクリフォナム人とオラン人であったが、これを都市外に逃がし、中央から来た官吏共を使者に立てるといふ名目で追い出して籠城策を取るが、援軍は来なかった。

『ま、今となつては詮無い事だが、もう少し上手く立ち回れていたらと思つ、性には合わぬが、軍人が貴族に賄賂でも贈つておればこうはならなかつただろう。』

そして5ヶ月の後、アルトリウスの英雄譚だけを残してハルモニウムはこの地から消えたのである。

## 第2章 昔語り エルレイシア編

「いろいろあったんですね・・・」

ハルがアルトリウスの語った内容に深く頷く。

『ほう？少しは前任者に対する敬意が出てきたと見えるな、良きかな良きかな。』

ハルが敬語を使い始めた事に気が付いたアルトリウスが顎を上げる。

「ええ、何も無い所からここまでの都市を築き上げたんですからね、敬意も払います。」

『ふっふっふ、栄えある前任者としてこれ程の褒め言葉があるうか！』

気を良くしたアルトリウスは腰に両手を当ててご満悦の様子である。

ハルがその姿に苦笑していると、エルレイシアが徐に口を開いた。  
「では次は私ですね。」

エルレイシアはクリフォナムの民が侵攻する太陽神の神官である。  
「クリフォナムの民は様々な神を持ちますが、何と云っても一番の恵みをもたらす太陽神様が主神としてあがめられているのです。」

ちなみに帝国でも太陽神は主神であるが、クリフォナムの太陽神が慈愛と恵みを象徴する穏やかな性格なのに対して、勝利と支配を象徴する攻撃的な性格を持った神になる。

太陽神の神官は、大地の巡検という修行を10年間行つた後に、どこかの村や都市で神官として神殿を持ち、太陽神やその他の神の祭祀を執り行いながら後進の指導をする。

太陽神神官の数は決して多くは無く、適性審査をくぐり抜けた少

年少女が特定の先輩神官の下でしばらく教養や旅に出るにあたっての訓練を受けた後に大地の巡検が始まる。

また、太陽神は女性神格であるため神官には少女が選ばれる事が多い。

ちなみに神官の結婚は否定されておらず、太陽神官の子供が神官見習いとして修行する事も珍しくは無い。

「私の師はアルスハレア様です、私の叔母にも当たりますが、アルトリウス將軍は御面識がおりになるのですね？」

「おう、アルスハレアどのには一方ならぬ世話になった、ご壮健であられるか？」

「はい、お陰様を持ちまして、アルトリウス將軍の計らいで裏切り者呼ばわりされる事も無く、今はフリード族の集落で暮しております。」

アルトリウス言の通り、エルレイシアの叔母であるアルスハレアは、大地の巡検を終えた後、アルトリウスがハルモニウムに設けた太陽神殿の神官を勤めた。

クリフォナム人の大反抗の際にはアルトリウスによって都市から出され、他の住民達と同様に敵方であるアルフォード王の下へ送り届けられている。

「それは何より、アルフォードの奴めも約束を守ってくれたようであるな・・・おお、失礼した、その話はまた別に聞くことにしよう、話を続けてくれ。」

エルレイシアの問いに対し、アルトリウスは懐かしそうに答えるが、エルレイシアの話が途中であった事を思いだし、直ぐに話を続けるよう促した。

「はい、私は神官としての適正があった為に、その叔母の元で幼少から修行をしておりました、大地の巡検に出たのがちょうど10年前の12歳の時です。」

村々を回り、クリフォナム人の住み暮す地に留まらず、北に住むハレミア人や西のオラン人の地、帝国、東照国、シルーハ、果ては

遊牧騎馬民族のフェン人の住む地にまで足を伸ばし、様々なモノを見知った。

「みんなは余り遠出はしないみたいでしたけれども、私は兎に角いろいろんなモノが面白かったのです。」

微笑みながら語るエルレイシア。

ほとんどの神官達は、比較的安全なクリフォナム人の住む地域のみで大地の巡検を済ませ、足を伸ばしたとしても同じ宗教を信仰するオラン人の住む地まで。

それを考えれば、エルレイシアの旅は壮大なもので、それ程遠方かつ未知の土地へと巡検を広げた者は多くは存在しない。

その中で目にしたのは、様々な不幸や幸福。

戦災にあつた場所、他部族から襲撃を受けて全滅した村、疫病で滅んだ町、富み栄える都市や城塞、貧しいながらも平和だった町が、2回目に訪れた時、廃墟なつていたこともあつた

「それでも人々は一生懸命生きています。」

様々な異国の風習や自然に文化、生活様式、迷信、信仰、儀式、食べ物、そして改めて知るクリフォナムの民が住み暮す大地。

「残念ながら、ハルの故郷の群島嶼までは行けませんでした。」

それでも10年掛けたとは言え、大陸西部のほとんどを回り尽くしている。

「当然、危ない目にも遭いましたよ？」

「・・・なんでそこで。」

なぜか疑問符付きでハルを見つめるエルレイシアに、ハルは何か言いかけたが、途中で諦めた。

『神官殿は心配して貰いたかったようだな。』

アルトリウスに囁かれ、ハルは無言で頷くが、何も声を掛けて貰えなかったエルレイシアは少し寂しそうである。

「むう・・・いいです、でもとにかく危ない目にも遭いました。」

クリフォナムやオランの土地で太陽神官を襲うような者はいないが、その他の地や帝国や東照、シルーハから来ている奴隷商人、山

賊夜盗の類いには通用しない。

神官に選ばれる子供達は見目麗しい者が多く、途中で掠われ奴隷となってしまう者や夜盗や山賊に襲われて命を落とす者も当然いる。エルレイシアも幾度無くそういった者達に襲われはしたが、丈術と神官魔術で切り抜けてきた。

「幸いにも無事10年の勤めを果たす事が出来、神殿を設ける場所を探していたのですが・・・。」

その途中、野宿している所を帝国人の山賊に捕まってしまったのである。

「運命だと思いました、十分に生きたとは申せませんが、今まで大過なく過ごせたのにも関わらずこのような事で不意を突かれてしまつて、情けないと思うと同時に、これも太陽神様の思召しかと・・・でも、運命は別にあつたようです。」

そしてエルレイシアは熱っぽい目をハルに向けた。

「たまたまたつたんだと、あれほど説明したのに・・・」

余りに熱く見つめられ、身を引くようにしてこぼすハル。

ハルによつて荷物共々救い出された、クリフォナムの太陽神官エルレイシアは、この風変わりな辺境護民官と旅路を共にすることを選んだのであつた。

『・・・しかしハルヨシよ、その方結符を受けておるではないか、神官どのの事を受け入れたのだろう？』

アルトリウスがハルの腰に結わえ付けられた黄色の細長い布を示して言う。

「・・・ユイフ？」

『・・・我が語るより神官殿に話して貰った方が良からう・・・』

明らかに知らない様子のハルを残念そうに見つめた後、アルトリウスはエルレイシアへと目を向けた。

エルレイシアはアルトリウスから話を向けられ、喜び勇んで説明を始める。

「はい、結符は結婚を申し込んだ側から授ける布符のことです、ですから・・・あつ？何をするのですか！」

「冗談じゃ無い！俺は知らなかったんだからこれは無効だ！」

ハルが自分の結符を外そうとしているのを見て悲しそうにうめき、エルレイシアはハルの手を止めようと駆け寄る。

ハルは自分を止めようとするエルレイシアの手の柔らかさにどきまぎしながらも、結符を解こうとするが、結符は太陽神が認め、神官が念を施して結いつける物。

そう簡単に外れるわけが無い。

必死に外そうとするが、結符は固く結着されていてほどく事が出来ない。

「・・・止めておけ、帝国の指輪交換と同じなのだ、神が認めなければ外す事は出来ん、それに・・・その結符を受けた時に御主にも受け入れる気持ちがあったからこそ、結符はそこにあるのだぞ。」

アルトリウスの言葉にぴたりと動きを止めるハル。

その様子を見て嬉しそうに微笑み、ハルの腰の結符を改めて確かめるエルレイシア。

アルトリウスは腕を組んで人の悪い笑みを浮かべ、ハルを見ている。

「やっぱり、全然解けていません、ハルは私の事を・・・」

「・・・」

たちまちハルの顔が赤く染まる。

全然その気持ちが無かったと言えは嘘になる。

エルレイシアは見目麗しい女性であることは間違いない。

年はちよつとっているからうら若いとは言えないにせよ、すらりとした長身に長い金髪がよく映え、新緑を思わせる緑色の瞳も美しい。

胸も大きすぎず小さすぎず・・・決して治安や法が整備されてい

るとは言い難い地を主に選び、10年も旅を続けていてよく今まで無事に済んだものである。

旅塵にまみれてはいたものの、その輝くような美貌は初対面でもハルを圧倒した。

解放した際の礼口上もたおやかで丁寧なものであったし、自信の身よりもハルの身を心配し、その後色々旅路で尽くしてくれたことも記憶に新しい。

最初はほのかな好意を示してくれる、美しい道連れが出来たことに、内心喜んでいたハル。

ちよつとだけ、結婚したらこんな嫁さんが良いなとか、新婚みたいだとか、そんな浮ついた気持ちでいたことも事実である。

もつとも、旅をしばらく続けていると、そのあからさまな迫り方に辟易したので少し距離を置くようにしていたが、最初の好印象はそう簡単には消えない。

『ふむ、脈アリと見たぞ神官どの。』

案の定その気持ちをアルトリウスに見透かされた。

「本当ですか？ハル、私嬉しいですよ！」

アルトリウスの言葉に密着させていた柔らかい身体をさらにぎゅうつとくっつけてくるエルレイシアを無碍にも出来ず、ハルは久しぶりに感じる人肌の温もりと柔らかさに硬直する。

すりすりと胸に頬をこすりつけてくるエルレイシアにさらに身を固めるハルを見て、とうとうアルトリウスが笑い出した。

『うわははは、その道についても前任者の教育が必要なようであるな！後で大いに語ろうでは無いか！！』

「・・・う、うるさいっ」

## 第2章 昔語り ハル篇

何とか説得の末、エルレイシアを引きはがし、結符を未練がましくいじるハル。

しばらくは静かに時が過ぎるが、アルトリウスが徐に口を開いた。  
『……では、そろそろハルヨシの過去でも語って貰おうか。』

「……正直気は進まないのですが。」

ハルとしてはこのまま眠気に誘われたふりをしてしまいたい所であつたが、めざとくアルトリウスが声を掛けてきたことに、舌打ちしたい気持ちを抑えて言い洩る。

「私とアルトリウスさんの話を聞いたのですから、ハルも話さないといけません、ずるいです。」

「……わ、わかった。」

身を乗り出して自分の側へ近づこうとするエルレイシアに気圧されるハル。

好奇心を隠そうともしない1人と1体の視線に晒され、ハルは、はあ、とため息を一つついてから、ゆっくりと語り始めた。

ハルが生まれたのは群島嶼地方でも南部にある功張州<sup>クハリ</sup>。

今の帝国新領ク州である。

気候は温暖で雪などは滅多に降らず、2回の雨期で特産物である米の収穫も2回可能であるため、平坦地は決して多くは無いが、豊かな地である。

畜産は養鶏や養蜂以外は余り盛んでは無いのは平坦地が少ないことと無縁では無く、急な斜面と温暖な気候を利用した柑橘類等の果樹や、油を採取する為の油樹や黄櫨の栽培が盛んで、採取された油や蠟は群島嶼各地に限らず、果ては帝国やシルー八まで海路で運ばれていた。



人々は勇猛で、少々短気のきらいはあるものの、陽気で朗らかな気質である。

政治体制は大氏と呼ばれる実力者が諸州に君臨し、さらにその大氏に仕える少氏や地土、土豪が割拠する分封制。

南部の群島嶼は主立った大氏が27あり、群島嶼はこの27氏の連合制で成立っていたのであるが、それぞれ独立性が強く、互いに相争うことも多々あった。

一致して当たるのは外敵に対する防備の際で、27氏の内から選ばれた太君が諸氏の軍を率いるのであるが、事実上それ以外の時は小国家群と言った趣であり、統一された国家という概念は無いため、対外的にも群島嶼連合と呼ばれる。

「帝国の侵攻があったのは、自分がヤマトの剣士として独り立ちして間もなくでした。」

帝国の群島嶼戦役の始まりは今から8年前で終結したのは今より5年前。

この時、群島嶼は戦国時代に突入しようとしており、27氏の足並みは乱れ、帝国の侵攻に際して太君を選出することすら出来無かったのである。

その結果、攻撃を加えてくる帝国に対し、群島嶼は連合として十分な軍を組織することすら出来ずに敗退を重ねた結果、帝国側に位置する北部の諸州は瞬く間に失陥し、南部の8氏のみがかるうじて抵抗を続ける様相となった。

ク州を支配していたのはハルの本家筋である大氏秋都家。

臨時の職である太君代として残った8家を束ねて激しく帝国に抗戦し、さすがの帝国も群島嶼南部を攻め倦ねて戦線は膠着した。

「戦場に出たことがありますか・・・出来ればもうあんな思いはしたくないですね。」

防衛戦であるとは言え、圧倒的な大軍で迫る帝国軍に血みどろの戦いを繰り返し、ようやく戦線を支えている有様で、巷で謳われる

ヤマトの剣士の誇りや勇猛さ、名誉はその場面には存在していなかった。

ハルも訓練で一廉の剣士として師より認められ、ヤマトの剣士たる資格を得ていたのであったが、教えられていた戦いの仕方は全て実戦で吹っ飛んだ。

祖父、父、叔父ら一族の男は度重なる帝国の攻勢の前に屈し、皆戦死した。

秋留家の当主となってしまったハルは、一族の大半を失ってしまったが、それでも当主として戦場に出続けなければならなかったのである。

「・・・かなり辛かったですね・・・」

その時のことを思い出したのか、ハルが酷く疲れた目をした。

『・・・そうか』

「・・・」

アルトリウスとエルレイシアは、静かにハルが再び口を開くのを待つ。

しかし、そのような残酷な日々は比較的早く終演することとなる。結果を言えば帝国が譲歩し、秋都家ら群島嶼南部8大氏は帝国と講和したのであった。

表向きは講和であったが実質は降伏。

8大氏は新たな帝国貴族として叙任され、それぞれの領地を治めることを認められたが、これで群島嶼は帝国の支配下に入ることになってしまった。

「悪いことばかりでは無かったと思います、威張り散らしている帝国人はあんまり好きにはなれませんでした、良い人もいましたし、戦いは終わったし・・・」

しかし、それまで支配階級であった地土や土豪は平民とされ、さらに大氏がそれらの者を使役することは禁じられてしまった。

偏に頑強に抵抗した群島嶼の軍事力を削ぐ為の帝国の施策であっ

たが、お陰でハルは秋都家の衛士として得ていた給金を切られ、路頭に迷うこととなる。

農地は持つていたが、戦乱で荒れ果て、未だ昔日の地力を取り戻していない。

働き手も戦死したり、戦乱を嫌って逃走してしまったりと満足におらず、群島嶼の農産物はこの戦乱で大打撃を被った。

「それで、給料を得ようと職を探していたら、帝国の下級官吏の登用試験があつたんです。」

使用言語は帝国と群島嶼は同じであることから、方言さえ気を付ければハルにも帝国の試験は受けることができる。

幸いにも、不利な前線で圧倒的な帝国軍相手に奮闘したヤマトの剣士達は帝国からも高い評価を得ており、帝国は補助軍兵士や都市警備官吏として積極的に登用もしていた為、ハルは試験を突破し、めでたく帝都の警備官吏として採用された。

「で、しばらくは上手くやっていたのですが、貴族と争いを起こして左遷されたわけです。」

ハルが辺境護民官に任じられたのは2月前。

住んでいた官舎を引き払い、それまでに貯めた給金を全額故郷へ送付する手続きをした後、支給された交付金と残った給金、そして生活に必要な身の回りの物を、当時の上司の厚意により下げ渡された馬に乗せてはるばる北方辺境へ赴任してきたのだった。

「貴族と表だって争いとはな・・・よくも命があつたものだ、左遷で済んでおるのが不思議なくらいだ、まあ、それでも帝国から見れば北方への赴任は島流しにも等しい処置ではあるがな。」

「無理難題をわざわざ追加命令書でふっかけても来ましたしね、これが帝国との遣り取りの最後となるでしょうが・・・」

アルトリウスの感心したような言葉に、ハルは苦笑しながらハルモニウムの復興を命じた追加命令書を懐から取り出して再度眺める。

『・・・最後となれば良いが。』

アルトリウスが小さくつぶやくが、ハルは気付かず説明を続けた。  
「本当は赴任しなくても良かったみたいなんですが、前任軍団長の言つとおり、命の危険もありましたから、こちらへ来たんです、あの意味追加命令書は嫌がらせですよ。」

一通り履歴を披露した2人と1体は、しばらく難しいことを抜きに歓談する。

付近の名産品や周辺で取れる食材になりそうな獣や野草とその料理方法。

アルトリウスの武勇談にエルレイシアの宗教講義。

この3人で顔を合わせたのが今日初めてであることが嘘のように、夜更けまで話は途切れることなく続けられた。

### 第3章 シレンティウムへの道 ロット家の旅立ち篇

「お姉ちゃん、本当に行くの？」

不安そうな弟の声に少しためらう気持ちが生まれたけれども、私  
は行かなくてはならないのです。

「ええ、お世話になった方がきつと困っているのだからお手伝いし  
ないとね、分かるでしょう。」

「・・・うん、お姉ちゃんがそこまで言うなら。」

まだ子供と言っても良い弟に未開の地への道連れを頼むのは気が  
引けるけれども、2人きりの家族、離れ離れになることの方が考え  
られない。

「さあ、オルトウス、支度を手伝って、荷造りは終わっているのだ  
から。」

「うん！」

弟もようやく踏ん切りが付いたのか、用意した2頭の口バに私た  
ちの少ない家財道具を積み込み始める。

私はプリミア・ロット、18歳、帝都に暮す帝国の市民、そして  
弟、オルトウス・ロットは私より5つ下の13歳。

父と母は由緒正しき帝都の一般市民でしたが、両方とも流行病で  
世を去り、私は帝都の宿屋で給仕や受付、経理や事務の仕事をしな  
がら、残された弟の面倒を見てきました。

それ程裕福ではないけれども、2人で暮して行くには不自由のな  
い給金を貰い、平和に暮していた私たちの運命を変えてしまったの  
は2ヶ月前のこと。

私は瀕死の重傷を負ったのです。

いえ、一度は死んだのかも知れませんが。

あのとき、都市警備官吏のあの方が尽力してくれなければ、私の  
命はなく、弟は糧を失って路頭に迷っていたことでしょう。

ですから、受けた恩は全力で返さないと行けませんから、私はあ

の人を追って、北方辺境へ向かうことにしたのです。  
もちろん、あの方に私の一生を懸けても良いと思っています、い  
ろんな意味で！

「おらあああ、どけどけどけえええ！！！！」

どどどどどどど

突如現れたのは大通りを疾駆する6騎の騎馬。

乗っているのはいずれも身なりが良いが、場違いな嬌声を上げ、  
周囲を威嚇して下品な笑いを上げている。

買い物客で賑わう大通りはたちまち喧噪に包まれ、人々は騎馬に  
撥ねられまいと悲鳴を上げ、左右に逃げ惑う。

私は勤め先のシェフに頼まれた食材の買い出しの帰り。

たくさん荷物を抱え、とても機敏に動き回ることなど出来はし  
ない。

何とか道の端へと思ったけれども、考えることはみんな同じで、  
一斉に駆けだしてしまったものだから、何人もの人がはじき出され  
てしまう。

かく言う私もその内の1人。

特別鈍い方ではないけれども、重い荷物と突然の事態が私の身体  
を縛っていたのは事実。

私は周囲の人々に突き飛ばされ、はじき出されてしまって、不運  
にも疾走してくる騎馬の前へふらふらと押し出されてしまう。

「ああっ！！？」

私は悲鳴を上げると同時に、先頭を走っていた騎馬に撥ね飛ばさ  
れた。

ばぐっ……

どぞっ

きゃああああ

鈍い打撲音の後に、宙を飛び、道ばたへと倒れる私。

そこからの記憶は曖昧、と言うか、はっきりしない、なぜなら私は自分の身体を見下ろす位置に居たから。

あの記憶が定かであれば、私は確かに一部始終を見ていたけれども、とても現実とは思えない。

それでも後で顔見知りの人たちや、官吏の人から聞いた内容と私の見たことは一致しているので、私の見ていた事が事実なんだと分かる。

周囲の人々が悲鳴を上げる中、2人の男が私の身体に駆け寄った。  
「誰か応急手当が出来る者はいないか!!」

灰色の制服に身を包んだ1人の男が路傍にしゃがみ、私の様子を見て取り、周囲へ必死に呼びかける。

私が息も絶え絶えにか細くうめく様子を見て顔をゆがめている、無理もない、素人の私が見ても助からないくらいの重傷だと直ぐに分かる。

付近には私が買ってきたパンや果物、野菜が散乱していた。

私の身体はごぼつと気味の悪い咳と共に血の塊を道ばたへと吐き出した。

私は何も感じていないけれども、見開かれた私の身体の瞳はくすみ、うつろであるが涙が流れっぱなしになっている。

人だかりは出来ているものの、遠巻きにその様子を見ているばかりで助力を申し出てくる人はだれもない。

帝都市民で賑わう大通りは一瞬で静まりかえっていました。

「・・・乗馬から降りて下さい。」

同じ灰色の制服を着たもう1人の帝都治安省官吏は、目の前で騎乗している5名に守られた人物に対し、怒気を隠そうともせずと言

っていました。

騎乗の人物は金髪碧眼、すらっとした背の高い美男子ですが、目には退廃の光があります、身なりは良いのに裏路地に巣くう与太者と同じ目をしています。

周囲の護衛達もどこか荒んだ雰囲気をもとっていて、護衛丈を構える官吏さんを見て嘲笑を浴びせていました。

「ふん、治安省か、貴様にそのような権限があると思ってるのか？オレはヴァンデウス・エルト・ルシーリウスだ。」

名前を聞いて私は思わず息を吞みます。

帝都でも鼻つまみ者として有名なルシーリウス家の放蕩息子、いわゆるどら息子です。

しかし、その一族は帝国の上部に居並ぶ高官揃いで、彼の父親は皇帝補佐官筆頭の職にあるのですが、余りの素行の悪さに誰もが眉を顰める札付きの不良です。

いかな帝都の治安を預かる官吏であるとは言え、あの官吏さんが相手取るには些か荷が重い人物であると思いました。

それでも目に怒りの火を灯した官吏さんは、その名を聞いても退きません。

「・・・存じ上げております、ですが騎馬で人をはねた事について取り調べを致しますので、速やかに詰め所までの同道を願います。」

「断る、庶民1人撥ねたところでオレに何の罪があるというんだ？」  
努めて平板に言葉を紡ぐ官吏さんを挑発するルシーリウス。

庶民だって生きています！

とても酷い話ですが、これが帝国の現実、悲しいことです。が今の世の中貴族に逆らって生きていける帝国人は何処にもいません。

でも官吏さんは、屈しませんでした。

「・・・大通りでの騎乗走行は禁じられております、また、例え故意で無かったという場合にせよ、この件は不注意による傷害の罪に問われます、尤も、人の多い中央大通りで暴走行為をしていたのです、不注意とはとても言えません、被害に遭った方に対する保障と



救護を命じます、お抱えに腕の良い医師ぐらい居るでしょう？直ぐに呼んで下さい。」

私は、本当に感動しました。

官吏さんみたいな帝国官吏もまだいたんだなあ、と。

言葉を発することは出来ませんでしたけれども、私は私の為にそこまでして頂かなくても良いです、どうか退いて下さいと思いました。

例えこちらが正しくとも、貴族の意見に逆らってしまうと、どんな仕返しをされるかわかりませんから。

あの官吏さんが、私の事で辛い目に遭うのは嫌だったのです。

「断る！庶民にしてやる必要を感じない。」

「・・・重ねて命じます、この方に対する保障と救護を下さい。」

貴族の拒絶にも動じず、敢然と命令する官吏さんは、素敵でした。「ふふふはあつは、オレに楯突くのか、面白い、確かに戯れに大通りを駆けた事は認めよう、しかし、その女がとろいだけじゃないか、騎乗者の前を遮る行動は禁止されているはずだろ？」

「・・・それは軍使や急報などの緊急時、公的な任務の時だけの話です。」

「緊急だったんだよ！糞を漏らしそうだったんだ。」

げひゃひゃひゃひゃひゃひゃ

ひーひひひひ

取り巻きが下卑た笑いを上げ、周囲の市民達はその成り行きを固唾を呑んで見守ります。

正論で説得しようとする官吏さんに対して、不良達の態度は悪く不真面目さが全開で、さらに屁理屈を捏ねて官吏さんを馬鹿にしています、許せない。

「公務といやオレそのものが公務だ、オレは帝国貴族だからな。」

一寸考えた後出た言葉に、私は呆然としましたけれども、官吏さんは心底あきたみたいです。

「では、どうあっても同道願えないのですね？」

「はっ、当たり前だ、オレは悪くない！」

勝ち誇ったように言う貴族のどら息子。

しかしその瞬間、馬の上に官吏さんは乗っていました。

えっ？どうやって？

「なっ！？」

そして驚愕に目を見開くどら息子を馬から蹴り落とすと、色めき立って飛び掛かろうとする取り巻きの5人を杖でたちまちの内に叩き伏せてしまいました。

容赦なく振われた杖によって、取り巻きの人たちは全員伸びてしまったようですが、どら息子だけは手加減をされたのか、頭を振って立ち上がります。

それでも強烈な蹴りで馬から落とされたのですから無事なわけはありません。

ふらふらと立ち上がりはしたものの、どら息子は再び地面に情けなく尻餅をついてへたり込んでしまいました、ザマアミロですね。「ルキウス、その娘の容態はどうだ？」

官吏さんはどら息子の様子にしばらくは立ち上がれないと見たようで、素早く馬から下りると、私の下に駆けつけてくれました。

「・・・余り良くない、このまま手当を施さなければ、命に関わる。」

官吏さんの同僚で私の身体を懸命に介抱して下さった方が、首を左右に振りながら沈痛な表情で答えます。

確かに、私の身体はもう保ちそうにありません。

何せ意識は既に外へ出てしまっていますし・・・

官吏さんは大胆にもまさぐるように私の服の下の胸に手を当て、それから脇腹や背中に触れていきます。

こんな時に不謹慎かも知れませんが、私は思わず赤面してしまいました。

「・・・背骨と肋骨が折れている、内蔵も傷付いているようだ。」

「ああ、それは分かるが、俺たちじゃあ手に負えない。」

官吏さんの言葉に同僚さんが顔をゆがめます。

「いや、出来るだけのことをしよう・・・すみません！その軒先を借りますよ！」

官吏さんはそう言って私の身体を近くの商店の店先に運び、同僚さんに言って人払いをします、何をなさるのでしようか？

「・・・天地におわします神々に、かしこみ、かしこみ申す、揺らぎし魂を還し、破れし身体を癒し給え。」

私が興味深く見ていると、官吏さんはぶつぶつと小さくそう唱えて私の胸とわき腹に触れました、そして・・・キス？

えっ？そんな・・・でも、官吏さんなら、いいかも・・・なんて。真っ赤な顔で自分がキスされている様子を見ているという変な光景。

ぼうつと官吏さんの手が仄かに光っているような感じがした瞬間、私は酷い痛みに襲われ、思わずうめき声を上げてしまいました。

「・・・？」

ほっとしたように私を覗きこむ官吏さんの顔が間近に・・・きやつ、と思う間も無く、再び襲ってきた酷い痛み、私はむせ返り、咳き込み、血の塊を官吏さんの服に飛び散らせてしまいます。

それでも官吏さんは少しも嫌な顔をせず、にっこりと微笑んで私の顔の血や汗、涙を同僚さんが用意した布で丁寧に拭い取って下さいました。

「もう大丈夫かな？とりあえず折れた骨と傷ついた内臓を取り繕っておいたから、安静にしていれば、直に動けるようになると思う。」

「はい・・・ありがとうございます。」

何とかそれだけを言葉にすることが出来ましたけれども、その直後に私は気を失ってしまいました。

弟から聞いた話では、私を家まで送り届けてくれたのは同僚さんらしく、官吏さんはいなかったようです。

それから1月半後、私の怪我は不思議なくらいの早さで治りました。

体力も回復し、職場にお礼と謝罪をかねて出向いた際、官吏さんの運命も知りました。

職場の同僚にあの騒ぎを見ていた人が居たのです。

官吏さんは騒ぎを聞きつけたどら息子の父親が差し向けた私兵にも、堂々とした口上でどら息子の非を鳴らし、最後は取り調べに応じなければ逮捕するとまで言い切り、その目の前で逃走しようとするどら息子を殴りつけたそうです。

私兵たちも官吏さんの乱暴さに怯み、またその正当な主張に無理を通せず、それでも泣き喚いて助けを求めるどら息子に困り果てて最後は父親のルシーリウス卿を呼んだそうです。

ルシーリウス卿は息子の非を認め、5日後に官吏さんの詰所へ息子を出頭させる事を約束してどら息子を引き取ったそうです。

官吏さんも非を認め、当人を出頭させるとまで言っている高官に、それ以上主張することも出来なかったのでしょうか、どら息子を解放したのです・・・

その3日後に官吏さん・・・名前はハル・アキルシウスさんは、北方辺境へと旅立たされてしまいました。

密かに今回の騒ぎの顛末を楽しみにしていた帝都の市民達もがっかりしていました。

市民は皆貴族の横暴には辟易していましたし、だらしない官吏にも愛想を尽かせていたのですけれども、ハルさん達の様な清廉な官吏もまだ居たのだと少し期待したのです。

しかし現実には厳しいもの、ようやく現われた正義の味方は、敢え無く貴族に敗れて左遷。本当に現実には厳しいのです。

帝都にもう末練はありません、私はハルさんに付いて行きます！

「お姉ちゃん、その官吏さんの事好きなのじゃないの？」  
「ませた事を言う弟の頭をぽかりとやった私の顔は多分真っ赤、  
でも決意は揺らぎません。」

### 第3章 シレンティウムへの道 秋瑠楓篇

帝国新領ク州は夏の農繁期を迎えていた。

1年に2回、稲の収穫がある群島嶼は、現在大陸より一足早い収穫期のまっただ中。

黄色く熟れ実った水稻で田は覆われており、人々は忙しく収穫作業を行っている。

ク州でも比較的平地の多いアキル村は、アキル山の麓からクハリ川まで一面に田が広がるク州の中でも屈指の穀倉地帯、今年は天候も良く、例年以上の収穫が見込まれそうである。

人々は朝早く日が昇る直前から夜遅く日が沈むまでを米の収穫に費やす。

戦乱で痛んだ土地は、5年の歳月でようやく元通りになる兆しを見せ、暗かった人々の目にも明るさが徐々に戻ってきていた。

収穫も一段落が付き、秋留家では使用人や親族一同全員が屋敷内の温泉で汗と泥を落とした後、屋敷の大広間で収穫したばかりの米を炊き出して小宴を催していた。

収穫した米の大半は、粳のまま貯蔵倉に入れたが、明日からは、米酒、米酢の仕込みに、保存餅づくりでまた忙しくなる。

全員が大いに米を食べ、肴をつまんで昨年仕込んだ米酒に舌鼓を打つ。

その内芸達者な者達が三味線や木笛の演奏を始め、何時しか小宴は本格的な宴会へと変わっていった。

帝国に敗れて早5年、かつて誇り高き戦士や剣士を多数有し、比較的穏健な民族の多いセトリア諸国では異色の武断国家群として知られた群島嶼連合。

近隣諸国家との抗争により纏まった群島嶼は戦術を編み、兵を練

り込んでその後の帝国との紛争にも耐え抜いてきた。

今、かつての誇り高き独立は破られ、戦士や剣士は居場所を失ってしまった。

剣士たちは、ある者は武の誇りを持つて帝国に雇われる道を選び、またある者は誇りを胸に秘め、荒れた土地を耕す道を選んだ。

独立を喪わしめ、支配者となった帝国はしかし、それぞれが納得する道を選ぶ自由を与え、そして群島嶼のヤマト人たちはその寛大な措置を疑いながらも受け入れることで、帝国の支配下において平和を享受し始めていた。

独立を喪った。

誇りを失った。

家族も失った。

しかし、今は平和がある。

ほとんどの群島嶼人は身内や友人を戦災で亡くしているが、元々武を尊ぶ風習から死に対する忌避感が薄いことも相まって、この5年間で人々はそう前向きに思えるまでになっていた。

そして、ハルの故郷である群島嶼南部8州は、戦争による荒廃が比較的軽く済んだ事もあり、土地と人心の復興をいち早く成し遂げつつあったのである。

宴会が行われている大広間から少し離れた濡縁に、美しく若い女が腰掛けてぼんやりと夜空を眺めている。

涼やかな切れ長の目は長いまつげに縁取られ、すっきり通った鼻筋や細い頬と相まって、ややもするときつい印象を受けるが、瞳の色は優しい。

他の女衆と違い、長い黒髪は群島嶼の男衆がするように後方で結われているが、凜々しさと清楚さが上手く融合し彼女の雰囲気によく合っている。

服装も、ヤマトの剣士が身に着けるような袴に着物で、これも他の女衆が身に着けている足下までの着物とはかなり異なるものの、その着こなしに違和感はない。

その若い女は、夜空に浮かぶ月を眺めたまま寂しさを滲ませた声色でぼつりとつぶやいた。

「ハル兄のやつ、どうしてるのかな、元気にやってるのかなあ・・・」

そして視線を下ろし、所在なさに足を縁側から庭に向かって投げ出してぶらぶらと前後に揺らす。

庭にはこじんまりとした池が設けられており、時折飼われている魚が飛び跳ね、ぼちゃりという水音と共に、波紋が水面に広がる。

若い女はしばらく波紋で揺らめく池の水面をぼんやりと眺めていたが、池のふちに当たって跳ね返ってきた波紋が池の中心で被さり、月明かりが乱反射した際に、考えていた従兄の顔が映ったように思いい、少し驚く。

「えっ？ハル兄？」

しかし、すぐに波紋は散り、池の水面は平穏を取り戻す。

自分が発した驚きの言葉に対し自嘲気味な微笑みを浮かべると、彼女はぱつと濡縁から軽やかな身のこなしで立ち上がって空を仰いだ。

「しっかりしなきゃ！」

と、そこへ大広間と別の方向から老爺の声が掛かった。

「おゝい楓、晴義から便りが来とるぞ！」

「えっ、ハル兄から？分かった、すぐ行く。」

若い女、秋瑠楓は、老爺の声に素早く反応し、濡れ縁を軽やかに駆け渡り、老爺の居る鑑水で仕切られた離れの建物へ黒髪を翻してぼんと飛び移った。

「これっ、行儀の悪い！従兄からの文は逃げたりせん、きちんと橋廊下を渡ってこんか！」

「ごめん、源爺！でもハル兄の手紙早く見たいよ。」



息せき切って部屋へ駆け込んできた自分を見て顔をしかめる大叔父の秋瑠源継に、楓がぺろっと舌を出して謝ると、とたんに源継は相好を崩す。

「むむ、まあよい、許そう、しかし次からは気を付けい、いくら心待ちにしておった晴義からの文が届いたとはいえ、そちは秋瑠家の姫君なのだから、所作に気を付けよ。」

「うん、分かった・・・で、ハル兄からの手紙は？」

あまり悪びれていない楓の様子に苦笑しながらも、源継は可愛くて仕方ない甥孫をそれ以上叱る事もせず、帝国風に縦巻に封緘された手紙を楓に差し出した。

「わあゝ帝国風だゝ」

楓は受け取った手紙を興味深げに眺め回すと、左右の封蝋を外し、中身を取り出した。

しばらく時間をかけて、ハルからの手紙を読み下す楓は、一度顔を上げ、怪訝そうに源継を見ると再び手紙を読み直す。

「よく分かんない・・・左遷って、駄目だよな？」

「・・・晴義めは、左遷されたのか？」

「うん、そうみたいなんだけど・・・領地貰ったっぽいよ？」

「・・・それは左遷なのか？」

楓と言葉を交わした源継も、楓と同じような顔で首をかしげる。

「領地を貰って左遷とは、考え難いのう・・・今まで晴義は領地もちでは無かったのじゃろ？」

「うん、帝国の都で皇帝陛下の衛士やつてるって、言ってたよ。」

「うつむ、奇怪なことじゃ・・・」

郡島嶼では官吏という者が存在しない為に生じた誤解である。

群島嶼では地士や土豪から推薦された若者がまず、大氏の衛士として領地を持たない兵士や文官として出仕する。

その後戦功を挙げたり、顕著な功績を挙げた者だけが、領地を貰って新たな地士や土豪となるのである。

そのまま衛士としてしばらく勤めた後に、自分の故郷へ戻って地

士や土豪の後継者となる者も少なくは無いし、そうでない者も、衛士としてのみ勤め上げ、退職金を貰って故郷で引退生活を送る程度であり、領地持ちの地士や土豪に取り立てられる事は、非常に稀な事であった。

また、郡島嶼において土地は個人所有が基本であり、帝国における総督や貴族の支配権や官吏の統治権について理解できないための誤解でもある。

それ故に、辺境護民官として統治権を持って赴任したハルは、帝国では左遷の措置であっても、群島嶼では領地を与えられた大出世にしか思えないため、手紙の内容に楓と源継は混乱したのであった。「晴義は帝国の衛士として勤めていたのじゃから何らかの手柄を立てたのではないか？そのへんどうじゃ？」

「ハル兄、帝国の貴族と争いを起こして左遷？されて、殖領を与えられたみたい。」

殖領とは、新たに開拓される領地の事である。

一般的に、領地を与えられる場合でも、何も無いところから開拓を始めなければならぬ土地であるため、格下の褒美とされる。

「ふうむ争いを起こしたとな・・・なら左遷の理由は分かるが、それで殖領か？それでも帝国で領地持ちじゃろ？領地を与えると云うのは出世ではないのかのう、なぜ左遷なんじゃ？」

楓と源継は2人でハルからの手紙を挟んで腑に落ちない顔をしている。

楓はしばらく悩んでいたが、あつと思ひ出したことを源継に尋ねた。

「あ、それから、領地が遠くて、仕送りが当分出来ないから、まとめて金を送るってかいてある、届いた？」

「おお、それなら届いておる、かなりの額じゃが・・・お蔭さまで、もう今年から晴義の給金に頼らずとも暮らせそうじゃがな。」

源継はハルから送られてきた、帝国金貨の詰まった奥の木箱を振り返って見てそう言う。

この5年間はハルが送金していた給金で一族が何とか食い繋いでいる状態であったが、今年は雨期も日照も申し分なく、地力が完全に回復していないとはいえ、蓄えが可能になるくらいまでにはなった。「えっ、本当？」

楓がうれしそうに返す。

と言うのも、ハルが帝都へ出仕したのは戦災で荒れた農地が元に戻るまでの当分の間と言う話であったためである。

優しく強いヤマトの剣士であり、秋留一門の当主である従兄が故郷に帰ってきた段階で、楓はひとつの計画を立てていた。

そしてその計画を知っている源継は、少し口角をゆがめながら言葉継いだ。

「うむ、それ故に晴義をそろそろ呼び戻そうと思っておったんじやがのう、このような手紙を送ってよこすとは、すぐには戻せんか・

・

「ええ、何で？」

源継の言葉にがっかりした様子を隠そうともせず、楓は脱力する。

「当然じゃ、領地持ちになったからには責任があるう。」

「でも・・・」

「もう晴義は帝国に出仕した身じゃ、ましてや理由はどうあれ賜った領地を捨てることなぞできぬだろう、そこらは汲んでやれ。」

「うつん・・・」

源継の説得や説明にも、頬を膨らませてなかなか納得した様子を見せない楓に、源継はため息をつく、楓に対する切り札を切った。「・・・夫を待つのも妻の勤めぞ、それでは良き妻になどなれん、晴義にその話も出来ん。」

「い、嫌だよつ、ボクは・・・ハ、ハル兄のお嫁さんに・・・」

慌てて縋る様な顔で源継に言いたてる楓。

かわいい甥孫をいじめているような気持ちになってしまった源継であったが、ここでわがままを押さえておかねばと、心を鬼にして説得をする。

「であれば、我慢せよ・・・見ず知らずの地である帝国を縦断して、何も無い殖領で奮闘する晴義の元へ行くのは不可能じゃし、足手まといになるだけじゃ、であるから・・・」

源継が楓を説得するべく、言葉を尽くしてハルの道行が大変なものである事を説明し、故郷で待ち続ける事こそが最良の道であることを説いている。

楓は神妙な面持ちで下を向いて何事かを考えているようで、源継の言葉に反応を示さないが、源継はそれを理解していると受け取って、言葉を続けた。

「・・・行く！」

しかしそんな源継の言葉を遮り、楓は力強く宣言するように言う  
と、すぐに立ち上がり、準備するからと言い置いて自分の部屋へ向  
かおうとする。

「なあつ！？ま、待て、待たぬか！む、無理じゃと今話していた所  
であろうが！そもそも殖領とは何も無いからこそ殖領なんじゃつ！  
まともな生活なぞ期待できんぞつ。」

「駄目、行く、手紙の内容も気になるし、ボクも待つてらんない  
し、ハル兄、意外と人気者だし、変な女に引っ掛かってるかもしれ  
ないしつ！」

慌てて引き止める源継に、楓はきっぱりとした表情で言い放つ。

「・・・あの朴念仁にそんな甲斐性は無いと思うがのう・・・だあ  
つ、待たんか！」

「決めた！ハル兄の所へ行くつ！」

「ああ、藪蛇じゃったわ・・・この源継ともあろう者が失言とは・・・」

自分の部屋から飛び出して行こうとする楓の腕をかるうじて掴み  
止め、源継は情けない顔でこぼした。

一旦楓を落ち着かせ、源継は再度の説得を試みたが、楓は聞く耳  
を持たない。

ついには出発の準備や引き連れてゆく人間の選定に関わらされて

しまう。

「源爺、後はお願い、ボクは蔭者を10人ばかり連れていくから、これなら良いでしょ？」

「・・・わしが共を出来れば良いのじゃが、わしがおらねば秋留領を差配できるものがおらん、仕方ない、くれぐれも気を付けよ、あと出発はせめて十分準備してからにすることじゃ。」

「大丈夫だよ、これでも剣術は源爺に習ったんだし、神通術もそれなりに使えるんだから。」

あきらめた源継が言うつ、楓は明るく返事をする。

「・・・腕前を見込んで鍛えすぎたのが今は悔やまれるわ。」

事実、楓の剣術はヤマトの剣士であるハルの師匠、源継が鍛えこんでおり、また神通術は治癒術と土操術に秀でており、ク州でも並ぶ者が無いくらいである。

「源爺、ハル兄に何か言付けない？」

楓の言葉に源継はすつと立ち上がると、戸棚から皮袋を取り出して楓に手渡した。

「・・・ではこれを預けて置こう、晴義にきつと渡せよ。」

「分かった、源爺ありがとう！」

袋の中身を手触りから察した楓は、そう言つと源継に抱きついた。「お、おおっ？」

子供とばかり思っていた楓の、思いがけない女体の感触に驚く源継。

楓はしばらくしてから、満足そうに源継の身体を離すと、今度は橋廊下をきつちり渡り、見送る源継に手を振りながら自分の部屋へと戻っていった。

「帝国に食い込んでおけば間違いはあるまいが・・・。」

楓が去ったあと、源継はつぶやく。

地土という階級が失われ、平民へと転落させられたという負の感情が強い群島嶼の地土、土豪階級の老人たちに漏れず、源継も帝国にはあまり良い感情は持っていない。

しかしながら、階級的には下がったものの、税を支払う先が帝国へと一元化され、荒れた農地が復興しさえすれば、経済的には潤うことは間違いない。

また、降伏したとは言え元の敵を雇用する度量の広い帝国であれば、御家再興も叶うかもしれないと、当主の晴義が帝国官吏に採用されるのを止めず、むしろ反対意見を抑えもした。

そして今回、左遷されながらも領地を押し頂いた晴義は期待するに十分な才能を持っている。

分家筋であるが、楓を嫁にしておけば、一族の結束も固くなり、元主家の秋都家からの介入も防げよう。

しかし・・・

「・・・晴義め、可愛い楓をたぶらかしおって・・・くつ。」

悔しそつにうめき、源継は月と庭を少し眺めて心を落ち着けると、  
部

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1855z/>

---

辺境護民官ハル・アキルシウス

2011年12月29日22時47分発行